

# 掘辰雄 管見 — その二 —

上野英雄

## 加藤多恵との結婚

昭和十三年二月、掘辰雄は前年の夏、軽井沢の油屋旅館で知り合った加藤多恵<sup>1)</sup>と交際の後で婚約します。結婚式は同年四月十七日、室生犀星夫妻の媒酌によって目黒雅叙園にて挙行されました。掘辰雄三十四歳、矢野綾子の歿後三年してのことです。

掘辰雄の当時の加藤多恵子宛ての〈封書〉から推測すると、加藤多恵が当初この婚約に乗り気になれなかつた理由の一つとして、「作家の生活の不安定さといふもの<sup>2)</sup>」について、多恵の母が心配していたこと。もう一つの理由は、多恵自身が理系の人、できれば「新進の物理学者」のような人と静かな家庭を築きたかつた、という理想を抱いていたことにあるようです。この二つの懸案にたいする掘辰雄の返信を引用すると、第一の件については、

「作家の生活の不安定さといふものは、僕自身にとつてさへ、今度君を貰はうと決心するまでいくども二の足を踏まれたほどの大きな問題ですから、君のお母あさまが御不安に思はれるのは御尤もなことです。その點、矢野さんなども改めてよく御相談して、出

来るだけさういふ生活上の不安を除き去つた上で、君を貰ふことにします。」(昭和十三年二月四日付)

第二の件については、

「…しかしまあ、僕だつて、たとひ一番びりつかすでも、一高だけは理科を卒業したのですから、君もね、君の夢が半分はかなつたのだと思ひたまへ。それでまあ、負けておくんだな。

そんな冗談はともかく、そんな事をはつきりと言ふ君が僕はとても好きなんだ。これからも思つてゐる事は何んでも僕に言ふ方がいい。」(昭和十三年二月五日付)

それにしても、加藤多恵には母のほかにも弟の俊彦がおり、婚約したまま夭折した矢野綾子には父(透)と妹の良子がいます。この複雑な家族関係の渦中に立つ掘辰雄の媒酌を引き受けた室生犀星も加藤・矢野の両家に気を遣つて、とくにまだ少女である矢野良子の将来のために、掘辰雄が矢野家の養女として加藤多恵を貰つてほしい、という矢野透の希望を伝える。この辺の事情について、掘辰雄から加藤多恵子に宛てた〈封書〉には、左記のように慇懃な依頼の文面が見られる。

「これはをととひも一寸君に話して置きましたが、室生さんのお話では、いつか矢野さんから若し僕が結婚するやうだつたら是非何とかしてその相手の人を自分の家の養女（勿論名義上ですが）にした上で僕が貰ふやうな事にして呉れと、くれぐれも頼まれてゐるさうです。さうしたら、自分が萬一死んだあとでも、良子ちゃんのお面倒も安心して頼めるから、といふ矢野さんのお氣もちなので、それはただそれだけの事ですから、あんまりそれには君のお母あさまなどがおこだはりなさらぬやうに仰やつて下さい。」（昭和十三年二月四日付）

義父に当たる矢野透からの熱心な勧めにもうながされて、加藤多恵が婚約を承諾するとまもなく、堀辰雄は綾子と同じ病気で仆れる。その当時の多恵の心境について、短編小説『おもかげ』のなかで、堀辰雄は次のように書く。

「かうやつて月に三度は、この家（矢野家）を訪ねて、いま病気で仆れてゐる弘（堀辰雄）と、こちらの家（堀家）と、それから自分の家（加藤家）との間に立つて、一人でやきもきしながらすべての用談を一人で果たさねばならないやうな羽目になつた、われとわが身を、何か羽がひじめにせられるやうな思ひでかへり見ないわけにはいかなかつた。」（『おもかげ』）

この小説には、弘（堀辰雄）から依頼されて故矢野綾子の家へクロオデルの『マリアへのお告げ』という本を探しに行ったときの様子が描かれているが、このときすでに綾子の父も妹も、多恵を「お姉えちゃん」呼ばわりしている。伸子（多恵）は義父と義妹の案内で故綾子のアトリエに通され、依頼された本をすぐに見つける。が、

義父はさらに、「お姉えちゃんに着て貰へるやうなものがあるかな？」と形見分けの心配をする。結局、綾子が二度手をとおした「鼠色のスポーツ・ドレス」を形見分けにいただいて帰る。愛犬をつれた義妹に送られて、郊外の秋風の吹く道を歩きながら、「麥秋」という言葉が伸子の口を衝いてでる。

「麥畑だけがいかにも冷え冷えとした感じを漂はせてゐる。それがなんだか、ふいといまの自分自身の姿のやうな氣がした。――まだ二十五やそこいらで、どんなところへでも嫁いでゆける身なのに、自ら好んで、一生を病氣で過ごすかも知れないやうな弘なんぞの傍に、一生を委ねようとしてゐる自分自身が、自分でもふいと淋しくなつた。しかも、その弘には既に愛する人があつた。どうせ自分なんぞは……」（『おもかげ』）

多恵には天折した人の繪姿が浮かぶ。と、自分とはときどきいけなくなる。自分にはこれからその人生を居心地よくさせてあげなければならぬ人がいる。「そしてそれだけがまた自分を幸福にさせてくれるのだ」という反省の氣持ちに襲われる。

略血して、杉並にある加藤多恵の家で療養生活をしていた堀辰雄は恢復し、昭和十三年四月末、多恵とともに軽井沢の室生犀星の別荘を借りる。新婚早々で軽井沢に赴き、これから当てもない別荘さがしをする堀辰雄の不如意の生活を氣遣つて、室生犀星が東京馬込から差し出した「葉書」を引用すると、

「家が見つかるまで寛くりつかひたまへ。僕も五月のなかばには今年こそ行くつもりなり。……何かいるものがあつたら云つてくれたまへ、……」

多惠様よろしく」(昭和十三年四月二十八日消印)

これにたいして、掘辰雄は同年五月三日付、室生犀屋宛てに左記の返信をする。

「漸つと氣に入つた別荘が見つかりました。すこし山の中なので多惠子や良ちゃん達には少々氣の毒ですけれど、かう云ふ場所なら夏でも僕が仕事をしてゐられると思ひ、とうとうそれに決めました。こんどの日曜(八日)あたりそちらに移ります……五月、こちらにいらつしやる由、お待ちして居ります」(『書簡』)

蜜月を楽しみながら、軽井沢の山中に貸し別荘を探し歩き、やつと見つかった別荘に移転する。この辺の事情について描いた小説が『巢立ち』です。

「この山奥の村——去年彼と彼女とが其處ではじめて知り合つた——に二人が結婚して、一しよに暮らしてきたのは、もう一月ばかり前になる。六月のはじめだった。丁度、アカシヤが花ざかりだった。それから道ばたの藪は野茨の白い小さな花を簾がらせてゐた。數日、彼等はまだ誰あれも來てゐないその村ぢうを、二人で住むのにいいやうな小さい家を捜して歩いた。ちよつと好きさうなコッテエジは、その持主を尋ねて見ると、みんな他人の別荘だつたりした。」(『巢立ち』)

そんな散策をしていたある日、野茨の茂みのなかにアカハラの巢、そのなかの五、六羽の雛鳥と梢の上方の親鳥が目にとまる。この雛鳥の巢の在り処を二人だけの秘密の場所にして、數日後に來て見ると、雛たちはもうすっかり羽が生えそろうて、さえずっている。それからしばらくして、ある雨上がりの朝、彼らの山道の行手に、一

羽の小鳥が、足でも傷ついたのか、ぴよこんぴよこんと跳んでいる。それは巢立ったばかりのアカハラの雛鳥だった。彼は両手のなかにその雛鳥をおさえて、草むらのなかへそつと放してやる。そして彼はその両手でもつて彼女の手をにぎる。と、「さつきの小鳥の残していつた生命の燃焼らしいもの」を言いようもなくうれしく感じる。

ようやく彼の氣に入つたコッテエジも見つかった。「何處から何處まで木の皮葺きの、いかにも山小屋然とした造りが大へん彼の氣に入つたらしい。」それから早速、移転の仕事ですが、彼が病身なので、何もかも大抵彼女が一人でやらなければならない。「しかし、さういふ彼女にとつて不幸なことには、急に彼の父が病氣になつて二人とも彼の故郷によびよせられたのである。それがどうやら小康を得たので、再びその村に戻つてきたのはもう六月も末になつてからだつた。」(『巢立ち』)

ところで、掘辰雄が友人の津村信夫に宛てた書簡体のエッセイ『卜居』によると、掘辰雄はこのコッテエジの屋根裏部屋を自分だけの仕事部屋とし、階下の部屋だけを新妻と共同の部屋として新婚生活をいとむ。

「これは女房の奴には内證だが、私はこの屋根裏部屋にときどき閉じ籠つては、全く一人つきりで、昔の自分の青春に訣別を告げようという陰謀。——が、その代り、階下の、女房と共同の部屋には、女房に買つて貰つたトルストイ全集だの、ジャック・シャルドンヌの『祝婚歌』や『クレエル』などを積み重ねて、一方、大いに結婚生活者の心理研究もしようといふ感心な心がけさ。……當分、そんな二種類の自分が、私の裡でお互に勝手悪さうに同居してゐるなら

うが、それはまあ仕方があるまい。<sup>(14)</sup>

このエッセイの後段を読むと、こういう山村の屋根裏部屋で、掘辰雄はひそかに、『マルテの手記』のなかの田園詩人、フランシス・ジャムの生活感情を満喫したがっていた雰囲気がかがいが取れま

## 注

- (1) 加藤「多恵」が本名。ただし、書簡においては「多恵子」とする。
- (2) 「掘辰雄全集 第九巻」一二二ページ。
- (3) 同右 同ページ。
- (4) 同右 一二六ページ。
- (5) 同右 一二二―一二三ページ。
- (6) ( ) 内は筆者注。
- (7) 「掘辰雄全集 第六巻」一四九ページ。
- (8) 同右 一五六ページ。
- (9) 「室生犀星全集 別巻二」四〇六ページ。
- (10) 「掘辰雄全集 第九巻」一三二―一三三ページ。
- (11) 「掘辰雄全集 第六巻」五八ページ。
- (12) 同右 六二ページ。
- (13) 同右 六六ページ。
- (14) 「掘辰雄全集 第五巻」一七七ページ。

## 王朝文学と折口信夫

『更級日記』は私の少年の日からの愛読書であった。いまだ夢多くして、異國の文学にのみ心を奪はれて居つたその頃の私に、或日

この古い押し花のにはひのするやうな奥ゆかしい日記の話をしてくだすつたのは松村みね子<sup>(1)</sup>さんであった。<sup>(2)</sup> (『更級日記』)

こうして少年の日に『更級日記』を読み、心の奥深いところで、「さういふ古い日本の女のひとりに人知れぬ思慕を寄せてゐた」と掘辰雄は述懐する。そしてさらに、このエッセイ『更級日記』のなかには、掘辰雄が『かげろふの日記』と『姥捨』を書いた経緯についても述べられている。けれども、『伊勢物語』、『源氏物語』や『蜻蛉日記』などの王朝文学に親しみ、これを本格的に研究してから、王朝物を素材にした作品を書き始めたのは、昭和十二年のことです。この辺の事情について、掘辰雄自身の手記に聞いてみると、

「……翌年(昭和十二年)の春になり、それまで張りつめてゐた自分の氣もちが急に弛むと、私は何かいひしれぬ空虚な氣もちに襲はれ、それから脱れるために、ひたすら心を日本の古い美しさに向けた。さうしておもに王朝文学に親しんだ。六月には、生れてはじめて京都へも往つて、その古い寺の一室でひと月ばかり暮らしたりした。

七月になると、私は再び仕事をしに信濃追分の宿に歸つて往つた。そこで、秋深くなる頃、『かげろふの日記』を書き上げた。或る女友達に宛てた七つの手紙は、この仕事に向ふかたはら、私の書いていたものである。<sup>(3)</sup> (『掘辰雄作品集第三「風立ちぬ」あとがき』)

そしてまた、

「伊勢物語や源氏物語などのオリヂナルな美しさにはじめて私の目を開いてくださったのは折口信夫博士である。いつの年であつたか、春から夏にかけて、折口博士の源氏物語の講義に毎週通つたり、

又、その同じ夏、軽井沢で親しくお目にかかったりしたことなどが、このノオト（『伊勢物語など』）を見ると、いまもなほ心にしみて有りがたく思はれる」と、一九四〇年（昭和十五年）七月、『掘辰雄作品集第六「花を持てる女」あとがき』に著者が記す。

折口信夫とその弟子小谷恒、室生犀星とその弟子掘辰雄。この四人の王朝文学研究者の最初の出会い、昭和十二年、室生犀星宅においてなされたらしい。掘辰雄氏は室生犀星氏の弟子であるが、著者（折口）と犀星氏とは特に親しく、その關係からか、掘氏も著者（折口）の學問・文學を慕ひ、しばしば著者（折口）の許に出入りした。また、著者（折口）の古い門弟小谷恒氏が室生氏に入門した時は、著者（折口）自ら連れて室生邸に赴き、師弟の禮をとらせた。小谷氏と掘氏とは室生氏の相弟子になるわけである。」（『折口信夫全集 第三十卷』）

こういう人間關係ができてまもなく、掘辰雄は小谷恒といっしょに『伊勢物語』の勉強をはじめ、折口信夫の古典文学の講義は国学院大学において、『源氏物語全講会』（昭和十三年）を聴講します。こうした講義録のすべてが、折口博士記念古代研究所編纂『折口信夫全集 全三十二卷』（中央公論社）に収録されているのみならず、釈迢空の号で発表した歌集『海やまのあひだ』、『春のことぶれ』、『古代感愛集』、『倭をぐな』、中編小説『死者の書』などもこの全集に収められている。弟子の掘辰雄も折口の王朝文学の研究だけでなく、歌集や『死者の書』も読んで、それについての感想文を発表している。筆者はしかし、釋迢空名で発表された作品は後述することにして、ここで

はまず、掘辰雄の王朝文学に関わる作品と研究から考察してみる。

『かげろふの日記』<sup>(8)</sup>（昭和十二年「改造」十二月号に発表）

『蜻蛉日記』は東三條摂政藤原兼家の妻（第二夫人）で、右大將道綱の母の書き残した日記です。著者名をあえて出さず、「道綱母」と記したところに、室生犀星は「つましい女を感じてゐた」（『道綱母』）という。書名の由来については、この日記上巻の終わりに、「猶物はかなきを思へば、あるかなきかの心地するかげろふの日記といふべし」とある所に拠つたとされる。平安朝時代に女性によって書き残された日記のなかで、この『蜻蛉日記』（九五四〜九七四年）は現存する最古のものとされる。掘辰雄はこのいかにも「煩惱おほき女の日記」をほとんどフィクションによって、『かげろふの日記』に仕上げるのですが、そのフィクション化の根底にあつたもの。それはマリアンネ・アルコフオラート『ぼるとがる文』（一九一三年）のリラケ訳だつたということが、『七つの手紙 或女友達に』<sup>(10)</sup>から確認されます。

「私の前に現はれたその『蜻蛉日記』といふのは、あの『ぼるとがる文』などで我々を打つものに似たものさへ持つてゐる所の、いはば、それが恋する女たちの永遠の姿でもあるかのやうに愛せられることは出来ても自ら愛することを知らない男に執拗なほど愛を求めつけ、その求むべからざるを身にしみて知るに及んではせめて自分がそのためにこれほど苦しめられたといふ事だけでも男に分かちせようと、それにも遂に絶望して、自らの苦しみそのものの中に一種の慰藉を求めに至る、不幸な女の日記です。」<sup>(11)</sup>（『七つの手

紙」)

以下、掘辰雄のフィクション化した『かげろふの日記』の粗筋を辿ってみる。「私」と「あの方」(柏木という殿)とのそもその馴れ初めは「あの方」からとどいた恋歌にはじまる。人の心など頼りになれるものかどうか、不安な日々を過ごしていた当時、たまたま「私の父」が陸奥守に任せられて奥州へ下ることになり、「父」は「私」に「あの方」への返歌を書くようにすすめる。「あの方」の御深切が口ほどでないように思われたとき、「私」はすでに道綱を身籠もっていた。道綱が生まれてまもなく、「あの方」がどこかの女に送るつもの御文を見つけたので、人をつけさせて探る。と、「あの方」が坊の小路の女の家に入るのを見とどける。その小路の女にも子供が生まれるという騒ぎになるが、その子は生まれてすぐ死亡する。やがて道綱が元服してから、「あの方」が最近近江という女のもとへ通い詰めだという噂が入る。「私」は自分の宿世の切なさに耐えきれず、京を離れて山寺にこもる。こうして自分は尼になっても、道綱の父が頼りになるのなら、わが子のことで心配はいらないのに。それがもどかしいので、煩惱に苦しむ。そんなある日、「あの方」が関白の子息を介して山寺に「私」を迎えに来る。今にも泣き出しそうな道綱に手を引かれて、「私」は山を下りる。下山して京に戻ったときの「私」の心境について、

「この頃の私の切ない心もちと云つたら、あの根を絶たれて、もうすべての葉は枯れ出しながら、しかもまだそのか細い枝は以前のままだ他の木の幹にからみついたままである、あの蔓草に似てゐるとでも言へようかしら。」(『かげろふの日記』)

下山して数日後には、「あの方」が現われて「私」の香や数珠を投げ散らし、乱暴の限りをつくす。「私」はもう身じろぎもせず、「あの方」のなすがままになっているうちに、「あの方」の方が「私」から苦しめられているのが分かってくる。

以上が小説『かげろふの日記』の粗筋ですが、折口信夫はこの作品を絶賛して、左記の批評文を書いている。

「掘君と會つた頃は、『かげろふの日記』を心に持つて居られたらしい。其で、いろんなさし出がましく聞える話などはしなかつた。

……原作が難解など言ふより、日本の中世の女ぶみが、如何に書き綴られて、こんな表現をするのか、我々は昔から、其理由を解きかねて来た。其を掘君は、ちつとも讀む人の心を混濁させることなく、書き方は原文から、一間づつ遅らせるといふ行き方で、考へは其に反して、一間もふた間も進めて行つて、と言つたぐあひに書きあげてゐる。事實、私は驚嘆した。掘君の詩人としての才能の上に、更に何かがあることを感じて、尊敬を新にしたのは、其爲であつた。」(『かげろふの日記』解説)

この「何か」が何であるかを探るための手掛かりとして、室生犀星が同じ素材で書いた『かげろふの日記遺文』(昭和三十四年)を引き合いに出して、筆者は両作品の対比から、掘辰雄の作品にある「何か」を考えてみる。

この中編小説の主人公は藤原兼家。兼家は女というものを衣裳のように取り替へなければ落ちつけない落莫たる性格の持ち主で、本妻の時姫のほかに、第二夫人の紫苑、さらに「町の小路の女」(牙野)、そして牙野の去つた後は「あたらし野の姫」をもち、紫苑には道綱

を生ませ、冴野には一児を死産させる。王朝時代は本妻と第二夫人の併立された時代であるが、紫苑は学を磨き知識も備えて家柄も士族の歌人です。冴野の方は浪人侍と別れて、町の小路にとり残された女で、歌読みの知識もないし、格別の才能もない。けれども、兼家にとっては冴野の家がいちばん心の安まる所である。終始、平安朝の雰囲気のなかで、小説は進行し、当然のことながら、冴野と紫苑と時姫のあいだに葛藤状態が生じる。兼家にとって必要なのは、歌読みの知識でなく、女の愛欲の姿態の美と殿への思慕であることを冴野から知らされて、自分はあの人の何であったのか、と紫苑は慄然とする。時姫は冴野を訪ねて、ぜひとも京の都を立ち去ってもらうように訴える。冴野はこの訴えを容れて、行くあてもない所へ旅立つ。山寺からもどつた紫苑は兼家に向かつて、自分と冴野が一人の女として殿に仕えることができなかつたらうか、と嘆息する。けれども、事態はすでにおそい。

『蜻蛉日記』という同一の原典を素材にしなが、小説の中心人物を誰にするかによって、二者二様のフィクション化が成立しました。それにしても、堀辰雄が『かげろふの日記』のなかで、「私」＝「紫苑」を主人公にした根底には何があったのか。『七つの手紙』<sup>(15)</sup>で打ち明けたとおり、筆者はここにリルケが翻訳し、『マルテの手記』にも引用された『ぼるとがる文』の下敷きを推測せざるを得ません。それをリルケの言葉によって表現すると、

「恋する女は、つねに変化をもとめて瞬時もじつとしていない男のそばで、永遠の女性のシンボルのように、運命とは何のかかわりもなくじつとごかぬ固いところを取りまもっている。そして、恋

の女のうつくしきは、いつもその愛人より一際立ちまざっている。ちやうど運命よりも生活が偉大であるように。彼女のしずかな献身は無限に深い。そこに彼女の幸福がある。」<sup>(16)</sup>（『マルテの手記』）リルケにこういう表現をさせた『ぼるとがる文』とはどんな恋文だったのか。これはマリアンナ・アルコフオラート（一六四〇〜一七二三年）というポルトガルの女性の五通の手紙でして、星野慎一氏の要約によると、

彼女は「一六六五〜六年頃ポルトガル独立戦争援助のためポルトガルに来ていたフランスの若き士官シャミリー侯爵と恋に陥った。

しかるに侯爵は、ただ一場のすさびとして彼女を棄てて一六六七年帰国してしまった。マリアンナは、これを聞いて驚き、愛人へ書簡を送った。しかし、一度も返信を手にすることが出来なかつた。愛の言葉は次第に対象にたいする訴えとなり怨みとなり、ついにはその愛人を越えて非情の結晶となつた。」<sup>(17)</sup>（『マルテの手記』注）

折口信夫の指摘した「何か」とは、堀辰雄のフィクション化の根底にあった『ぼるとがる文』についてのリルケの解釈にほかならない、と筆者は考えます。

『ほととぎす』<sup>(18)</sup>（昭和十四年「文藝春秋」二月号）

これは『かげろふの日記』の続編に当たると小説です。小説のヒロインで、この日記の筆者でもある「私」は前者と同一の「道綱母」ですが、道綱は成人して大夫の官位から右馬助の地位に昇進する。

「私」は殿との仲を絶とうとして絶ちきれない中途半端な暮らしをしている。そんな「私」のことを気づかつて、一生受領のまま退官

した父が、京都の近在に住居を用意してくれたので、殿があてがつてくれた都の家からここに転居する。けれども、身も心も衰え出している。「私」には、自分の死んだ後に道綱だけが頼りなく残されることを思うと気がかりでならない。どこから養女が来てくれないものか、こんな妄想に悩みはじめた折柄、意外な縁がもたらされる。それは殿が昔、さる御女に生ませた少女がいま志賀の兄に当たる禪師のもとで質素な暮らしをしている。十二、三歳の少女ですが、この子を養女に迎える話が、人を介して順調に成立する。殿も「私」の家でわが娘に会って驚き、撫子と名付けて可愛がり、この子に歌芸や文学を教育するように「私」にすすめる。

ところで、道綱の上司の頭の君がどこから聞き知ったのか、「私」のところに撫子が養子になったことを知って、彼女の何を何くれとなく尋ねてくる。道綱にも撫子のことをあれこれ聞いたあげく、ついに撫子に求婚する御文を「私」あてに送って奇越す。まだ婚札期にも達していない撫子で、あまりに頻繁に訪ねられることに業を煮やして、「私」はこのことを殿に打ち明ける。と、八月まで待たせるように、というのが殿の返信でして、「私」はこのことを頭の君に伝える。頭の君はとてそんなに長くは待ちきれないと訴え、殿は殿で頭の君がそんなに足繁く「私」の家を訪ねるのは、「私」にやましいところがあるからだ、と邪推する。その殿からの手紙の裏に、「私」の書いた歌は、

いまさらにいかなる駒かなつくべき

すさめぬ草とのがれにし身を

そのうちに五月に入つて、ほととぎすがいつになくよく啼いた。

厠にはいつてほととぎすの啼き声を聞くのは悪い前兆だという。はたして、頭の君からの御文かだんだん途絶えがちになり、ついにそれが絶えてしまった。その頭の君が実はいつのまにか他人の妻を偷んでどこかへ姿を暗ましたという事が分かったのは、七月なかばを過ぎてからのこと。あれほど執心していた姫君を措いて、あまりといえはあまりの出来事に、「私」はげしい憤りと悔いを感じずにはいられない。しかし、気持ち落ちついてみると、頭の君の唐突な振る舞いも起こるべくして起こったように思えてくる。

「もう殆ど手に入れられるばかりになつてゐた撫子をいつまでもあの方に限りなく遠いところにあるかのやうに思はせ、あの方のお気もちをわざと焦らし抜いて、御自分でも御自分がもう何を欲していらつしやるのかさへ見分けられないやうにおさせして、とうとうこんな思ひがけないやうな結果にならせてしまつたのは、この日頃の私、……この私の所為だつたのではなからうか。」（『ほととぎす』）

『姨捨』(昭和十五年「文藝春秋」七月号)

『更級日記』が掘辰雄の少年の日からの愛読書であつたというところを、筆者はこの章の冒頭で引用文をもって明示しました。この日記の筆者は菅原孝標の二女で、一〇二〇年、彼女の十三歳のとき、父の任国上總の国を出発したことに筆を起し、一〇五八年、夫と死別するまでの追憶が記されている。信濃の更級の里の風物にも馴染んだ掘辰雄が、この『更級日記』を原典として描いた小説が、『姨捨』です。この短編小説を書き始めた動機について、

「『かげろふの日記』を書き、さらにその女のやや心の落着いた晩



年の一挿話を描いた『ほととぎす』を書いた後、私もまた孤獨の境涯を去り、……去年の夏にならうとする頃、或雑誌に依頼された短編小説を書くために本當にしばらくふりに一人きりでぶらつと信濃に出かけて往つた。そのときその山麓の古びた村と『更級日記』と——私が少年の日から別々にそれを懐しんできた二つのものが、不意にその折の私の餘裕のある心の裡で結び合はさり、私は再び王朝の日記から取材して小さな短編を書いて見る氣になつた。」（『更級日記』）

この小説のヒロインの「女」は平安朝のさる受領の二女で、十三歳の少女のとき、上總の國から父、姉、継母といっしよに京にもどつて来る。京には母が五年間も一人で父の古い屋形に留守をしていた。京へ上つたら、この世にあるだけの物語を読んでみたいというのが、少女の願ひだつた。それだけに、源氏の五十余卷その他の物語を一人のをばから贈つてもらつたときの少女の喜びは、言葉に尽くせなかつた。こういう物語のなかの女達の不幸な運命のなかに、少女は好んで自分を見出してゐた。物語の外の家庭においては、京にもどつてから継母と乳母が相次いで他界し、三條の屋形の家が夜中の火災で丸焼けになる。さらに慰め合つてゐた姉までも、仮住まいの家で二番目の子を生んで亡くなる。

こういう数奇な運命のなかで「女」が二十になつたとき、秋の除目で父が常陸の受領に任せられ、父は今度は「女」（二女）と妻を京に残して、単身赴任する。五年の任期を果たしてもどつて来た父は、身体も衰へて退官する。「女」は相変わらず少女らしい夢を抱いたまま、物語の世界に埋もれてゐる。そんな「女」にその頃しきりに宮

仕えを勧める人があつて、父母も「女」の行く末を案じ、宮に差し出すことに決り納得する。宮仕えは、世間見ずの「女」には意外につらいことばかりで、およそ物語に描かれてゐるようなものではない。それでも、才名の高い右大辨（だべん）の殿から声をかけられたり、あの「女」としめやかな話をしてみたい、あの「女」に自分の琵琶を聞かせたら、どう聞かだらうか、などと思われたこともある。しかし、殿は公儀の重い身で多忙なうちに、「女」のことも次第に忘れて行く。

「なにさまで思ひ出でけむなほざりの木の葉にかけし  
時雨ばかりを」

「女」はこんな歌を口ずさんでほどなく、二十も年上の男の後妻になる。その夫が秋の除目で信濃の受領に任せられ、「女」は夫といっしよに信濃に下る。少女の頃多くの夢を抱いて上つて来た逢坂の山を、再び越えて行く。「女」はそのとき、「私の生涯はそれでも決して空しくはなかつた」と感慨にふける。

以上が掘辰雄の『姨捨』の粗筋ですが、最後の段で著者が原典の『更級日記』を改作し、「女」が夫といっしよに信濃へ下るよう書き改めたことに触れて、折口信夫はその意図を次のように解釈する。筆者も同感したので、その解釈を引用すると、

「此時分の受領の妻の生活は、そんなに幸福なものではなかつた。男こそ、宮廷・大貴族に仕へるさう言ふ女房を、客分のやうにして迎へ、そのふらいに輝く思ひあがつた姿を、任國の人々の目に、ほのめかしてやるだけでも、天に上る氣持ちがしたものであらう。だからさう言ふ夫や、家人にとり捲かれた有頂天な喜び、反省などは都に置き忘れて来たやうな生活をさせてやりたかつたのであら

う。事實夫が信濃の國府（今の松本近邊）へ下るのに、誘はれなかつた彼女の生活が、その後豊かになつた風も見えなかつた。如何に平安朝も末に傾いてゐたと言つても、まだ院政時代にさしかかつただけの時代で、都人が、花の様な世の中を楽しんでゐるに十分だつた。ひとり醒めたやうに、この女性は、時々遠國の夫から送りとどけられる信濃の山づとを、つまらなさうに見てゐたであらう。其をもつと幸福にしてやりたかつたのだ。」（『かげろふの日記』解説）

『曠野』（昭和十六年「改造」十二月号）

「この短編（曠野）を書くまでの心境は『十月』のなかに書いてが、書き出してからは割合に樂に書けた。……おもに今昔物語の卷三十にある『中務大輔娘成三近江郡司婢一語』に據つたが、これと同じやうな話が伊勢物語にもあり、ともどもに私の心を惹いてゐた。」（『掘辰雄作品集第六「花を持てる女」あとがき」）

そこで先ず『十月』<sup>25</sup>によつて、『曠野』執筆前の心境と素材の準備を探つてみる。『十月』は昭和十六年十月、掘辰雄が三度目の大和路旅行をしたとき、奈良から京都、近江の琵琶湖まで足をはこび、旅先の各地から多恵子夫人に宛てた手紙を蒐集した文体になつていますが、この旅行自体が明らかに『曠野』執筆のための取材旅行だつたと考えてよい。以下、『十月』のなかから、執筆に直接間接に役立てたと思える所をいくつか拾つてみる。

クロオデルの『マリアへのお告げ』は大和路の明るい空の下で読んでみたくて携えてきた本であるが、戒壇院の松林のなかでこれを読んだときの印象について、「その女主人公ヴィオレヌの惜しげも

なく自分を與へる餘りの純真さ、さうしてゐるうちに自分でも知らず識らず神にまで引き上げられてゆく驚き、その心の葛藤、——さういつたものに何か胸をいつばいにさせ出してゐた。」（十月十九日）折口博士の論文のなかに出てくる「葛藤といふ狐」の話に惹かれて、『今昔物語』と『靈異記』を買つて、奈良ホテルで読んだときのこと。「それは一人のふしあはせな女の物語。——自分を與へ與へしてゐるうちにいつしか自分を神にしてゐたやうなクロオデル好みの聖女とは反對に、自分を與へれば與へるほどいよいよはかない境遇に墮ちてゆかなければならなかつた一人の女の、世にもさみしい身の上話。——さういふ物語の女を見いだすと、僕はなんだか急に身のしまるやうな氣もちになつた。」（十月二十四日）

京都の古本屋で、ルイズ・ラーベというリヨンの薄倅な女詩人の詩集をたまさかに見つけて、これを買つてすぐに読み、感激した一節を引用する。へゆふべわが臥床に入りて、いまでも甘き睡りに入らんとすれば、わが魂はわが身より君が方にとあくがれ出づ。しかるときは、われはわが胸に君を掻きいだきゐるがごとき心ちす、ひねもす心も切に戀ひわたりぬし君を。ああ、甘き睡りよ、われを欺りてなりとも慰めよ。うつつには君に逢ひがたきわれに、せめて戀ひしき幻をだにひと夜與へよ。」（近江の琵琶湖に到着した日の午後、<sup>26</sup>）

「ここで、こんどの物語の結末——あのしあはせな女がこの湖のほとりでむかしの男と再會する最後の場面——を考へてから、あすは東京に歸るつもりだ。」（十月二十七日）

こうして『今昔物語』のなかの中務大輔の娘をヒロインにしなから、クロオデルの惜しみなく愛を與える純真さ、失恋し欺かれても

なお恋する男に哀婉の情を捧げるラーベの心を知りつくして、掘辰雄の書いた『曠野』はどんな内容のものであったか。以下にその粗筋を辿ってみる。

頃日、西の京の六條のほとりに中務大輔が妻と一人娘といっしょに住んでいた。その娘がおとなびて来ると、中務大輔は娘の行く末を案じ、或兵衛佐に娘をめあわせた。それから二、三年は幸福な家庭生活をしていたが、やがて娘の両親が相次いで他界し、暮らし向きがいよいよ悪くなる。毎日宮仕えに出て行く夫のためにも、これまでのように支度を調えることが出来悪くなったので、娘が自分のことは構わないから、あなた様の為になるように別居するようにと訴える。男は彼女の献身的な哀願を身につまされる思いで、女の家を立ち去る。

「あの方さへお爲合せになつてゐて下されば、わたくしは此の儘朽ちてもいい。」女が自分から望んだことはいえ、待つことの苦しみの中に、女は自分の満足を見出さなければならぬ。男が去って一年後には、朽ちかけた家の寝殿は跡形もなくなり、松の古木は伐り取られ、築土のくずれがいよいよひどく、家屋敷が廢墟になりかけただけでない。ついに召使いもみんな去り、女は日々の糧にもこと欠く状態のなかで、暗にまぎれた細い月をぼんやり眺めながら、あるかないかの心地で臥せている。

わずかに雨露をしのぎながら、女は西の對の端に住み、もう一方の東の對には年老いた尼が、どこにも住む所がなく住みついていて。たまたま近江の国のある郡司の息子で尼の甥にあたる男が、尼の仮住まいに泊ったとき、西の對の女に一目惚れして、彼女をせむ

とも近江の国へお伴れしたい、と口説くように尼に頼む。尼の話は女の心中で、自分ももうあの方には逢えないのだという弱気と交錯して、胸を締めつける。

それから郡司の息子は夜毎に女のもとへ通い出す。ところが、やがて、郡司の息子が任果てて近江の国に下るとき、自分は国元に二、三年前にめとった妻を残してあるので、京の女は婢として伴れもどらなければならぬ事情を打ち明ける。すべての運命が打ち挫かれた女は、泣いて、泣いて、泣き通す。が、婢として一月たち二月たつうちに、「いつそもうかうして婢として誰にも知られずに一生を終へたい」と、女は考えるようになる。

「そこには、自分が横切つてきた境涯だけが、野分のあとの、うら枯れた、見どころのない、曠野のやうにしらじらと残つてゐるばかりであつた。」

そして数年後、近江の国に新しい国守が赴任して来る。その国守が琵琶湖の近くの村で郡司と会席したとき、一人の京風の婢に熱心な眼差しをそそぐ。どこかで会つた女に思えたのである。その夜おそく、女は国守の宿舎に案内された。国守は女を抱きすくめて、

「矢張りおまへだつたのか。」

待つことの苦しみを苦しみぬき、与えることの純真さに身を苛み、うら枯れた姿で前夫に抱かれた女の顔は、そのまま死顔に変わる。以上が掘辰雄の『曠野』の粗筋です。これよりも以前の大正十一年に芥川龍之介が同じ『今昔物語』を原典にして、同じテーマで『六の宮の姫君』(芥川龍之介全集 第五卷)という小説を発表しているので、折口信夫は両者を比較して、次のように批評します。

「一人を褒めるのに、も一人をけなすと言ふ行き方は、甚だ不幸な方法で、私などは、其をせぬことにしてゐるのだが、今の場合あまり適切に、一言二言で言ひきつてしまふことが出来るから、さう言ふ見方をさせて貰ふのだが、過ぎ去つた芥川龍之介、この人の王朝は、今昔物語式には最的確な王朝物は書いたけれど、源氏・伊勢が代表する平安朝の記録と言ふところには達しなかつた。掘君は心虚しうして書く人だけに、極めておほまかにではあるが、おほまかだけに、王朝貴族の生活のてまを適切に捉へることが出来た。」（『かげろふの日記』解説）

掘辰雄が『今昔物語』を原典としただけでなく、『源氏物語』や『伊勢物語』も十分に読んでから、この作品にとりかかったこと。さらに、これを書くための取材旅行までしていたことへの賛辞と見てよいであらう。

折口信夫の王朝文学の講義に策励され、小谷恒とともに『伊勢物語』を勉強してから、掘辰雄の書いた、いわゆる「王朝物の作品」について、筆者はここまで考察してきました。折口信夫はしかし、国文学者であるだけでなく、釋超空の筆名で歌集、詩集、小説も発表しました。そこで今度は、釋超空の創作を掘辰雄がどう読んだか、という問題に移ります。

掘辰雄の「隨筆ノオト」<sup>(36)</sup>の「Three Studies」のなかに、釋超空の歌集『海やまのあひだ』、春のことぶれ、詩集『古代感愛集』がメモされていますが、昭和二十三年、『古代感愛集』を寄贈された掘辰雄は同年の「表現」九月号に「『古代感愛集』讀後」<sup>(38)</sup>という批評文を

書く。そのなかで、諸篇のもつ神さびた感じ、詩句の重量感、ことに長編詩の充実感、神の内なる源泉から湧きあがってくる感じ、この書物は「私たちの持ち得た唯一の宗教的な詩集」だと断言する。「乞がい相」、「幼き春」、「古びとの島」、「夏日感傷」、「足柄うた」。こういう詩のなかの古い日本の美しさ、いじらしさを心惹かれ、自分もこれからは「自己」のうちにある自己を越えた自己<sup>(40)</sup>、つまり宗教的に荘嚴なものに心を向けなければならぬ、という。

昭和十八年に刊行された小説『死者の書』<sup>(41)</sup>については、同年の「婦人公論」八月号に「客」と「主」との対話体の批評文「古都における、初夏の夕ぐれの對話」を発表しているが、このなかの「客」掘辰雄と見てよい。二上山に葬られた貴人の亡き骸が、塚のなかで突然、深い眠りから村人たちの魂乞いによって呼び覚まされる。そして若い女主人公は毎日の写経に疲れて、幻想的になっていたある夕方、日の沈んで行く西の方の山ぎわにふと見知らない貴人の佛を見いだす。この辺の描写がいかに森嚴なレクキエムであつて、この小説は「唯一の古代小説だ。あれだけは古代を呼吸してゐる」、と「客」は評価する。

釋超空のこういう作品に感動して、掘辰雄は自分の主宰する雑誌「高原」に御歌の執筆を依頼する手紙（昭和二十一年一月二十二日）<sup>(42)</sup>を書き、角川書店から再刊する「四季」にも、詩でも歌でも小品でもなんでもよいから寄稿ねがいたい旨の依頼（昭和二十一年三月八日）<sup>(43)</sup>をする。

釋超空の聯作詩「掘君」<sup>(44)</sup>は詩集『現代襤褸集』に収められた四曲の詩篇ですが、軽井沢の村の子供たちと山林のなかで他愛なく遊ぶ

掘辰雄の姿をうらやんで詠んだ詩。その最後の聯を引用して本章を終えることにする。

「村の子を 友として遊ばねど、

たゞ清き生きものなる

村の子は 君が心を知りて

臆るらむ。君が門を―

君が居る 聰のあかりを―（「掘君 四」）

## 注

- (1) 拙稿「掘辰雄管見―その一―」（金沢大学教養部論集 32―1）。以下、「―その一―」と略記する。「―その一―」一〇二ページに既出。松村みね子は歌人としての筆名で、本名は片山広子。
- (2) 「掘辰雄全集 第七卷」一〇四ページ。
- (3) 同右 同ページ。
- (4) 「掘辰雄全集 第八卷」一六一ページ。ただし、（ ）内は筆者注。
- (5) 「掘辰雄全集 第八卷」一六五ページ。ただし、（ ）内は筆者注。
- (6) 「掘辰雄全集 第八卷」一六五―一六六ページ。
- (7) 折口博士記念古代研究所編纂「折口信夫全集 全三十二卷」（昭和四十年）昭和四十三年）中央公論社刊。以下、「折口信夫全集 第 卷」と略記する。
- 「折口信夫全集 第三十卷」あとがき四ページ。ただし、（ ）内は筆者注。
- (8) 「掘辰雄全集 第五卷」一一四―一五〇ページ。
- (9) 「室生犀星全集 第十一卷」四六八ページ。
- (10) 「掘辰雄全集 第五卷」一八二―一九五ページ。
- (11) 同右 一八四―一八五ページ。

掘辰雄 管見 上野英雄

- (12) 「掘辰雄全集 第五卷」一四八ページ。
- (13) 「折口信夫全集 第三十卷」三四四ページ。ただし、―は筆者。
- (14) 「室生犀星全集 第十一卷」九―一八ページ。
- (15) 「堀辰雄全集 第五卷」一八四―一八五ページ。
- (16) Rainer Maria Rilke: „Die Aufzeichnungen des Malte Laurids Brigge“ Rainer Maria Rilke SÄMTLICHE WERKE. INSEL-VERLAG. MCMLXVII. 6. BAND. S. 899.
- (17) 星野慎一編注「マルテの手記」（昭和二十九年。南江堂）六十一ページ。
- (18) 「掘辰雄全集 第六卷」八四―一九九ページ。
- (19) 同右 一一八ページ。
- (20) 「掘辰雄全集 第六卷」一八〇―一九二ページ。
- (21) 「掘辰雄全集 第七卷」一〇六ページ。
- (22) 「折口信夫全集 第三十卷」三四〇―三四一ページ。ただし、―は筆者。
- (23) 「掘辰雄全集 第七卷」一六九―一八一ページ。
- (24) 「掘辰雄全集 第八卷」一六五―一六六ページ。
- (25) 「掘辰雄全集 第八卷」十一―三十五ページ。
- (26) 同右 二十三ページ。
- (27) 同右 三十一ページ。
- (28) 同右 三十四ページ。
- (29) 同右 三十五ページ。
- (30) 「掘辰雄全集 第七卷」一七二ページ。
- (31) 同右 一七八ページ。
- (32) 同右 同ページ。
- (33) 同右 一一八ページ。
- (34) 「芥川龍之介全集 第五卷」四五〇―四六〇ページ。
- (35) 「折口信夫全集 第三十卷」三三九ページ。
- (36) 「掘辰雄全集 第八卷」三二七―三三三ページ。

- (37) 「折口信夫全集 第二十三卷」七〇―七九ページ。  
 (38) 「堀辰雄全集 第八卷」一三三―一三五ページ。  
 (39) 同右 一三三ページ。  
 (40) 同右 一三四ページ。  
 (41) 「折口信夫全集 第二十四卷」一三〇―二七九ページ。  
 (42) 「堀辰雄全集 第八卷」七十六―八十一ページ。  
 (43) 同右 七十七ページ。  
 (44) 「堀辰雄全集 第九卷」二二六―二二七ページ。  
 (45) 同右 二四三―二四四ページ。  
 (46) 「折口信夫全集 第二十三卷」三九二―三九六ページ。

### 『菜穂子』の成立

昭和十五年一月十五日の「帝國大学新聞」のアンケート「目下構想中の作品について」に就いて、堀辰雄は左記の回答を寄せる。

「……いま、僕は『菜穂子』（仮題）といふ小説を書かうとおもつてゐます。こんどのは僕としては出来るだけ小説らしい小説に仕上げつもり。……おぼえてゐるかしたら、僕のずつと前に書いた『物語の女』のなかに出てくる菜穂子といふ若い娘を。……あの娘がいつかしたら僕の裡ですつかり大人になつて、知らぬまに思ひがけず悲劇的な相貌を具へ出してきてゐたのです。……あのレンブラントの晩年の繪のもつてゐるやうな、冬の光に似た、不確かなそここに氣まぐれに漂ふやうな光を浴び出す一人の女の姿―そんな繪すがたを描いてみたい様な欲求が、いま、僕を捉へてゐるのです。」<sup>(1)</sup>（『覚書』）

こうして『物語の女』<sup>(2)</sup>に登場した菜穂子を主人公にした中編小説『菜穂子』<sup>(3)</sup>。これは『風立ちぬ』<sup>(4)</sup>と双璧を成す代表作で、着想してから七年後に完成し、昭和十六年「中央公論」三月号に発表されますが、作者の死後、『菜穂子』創作ノオト<sup>(5)</sup>が発見される。これは構成上のメモを書き留めた「ノオト」<sup>(5)</sup>でして、作品に登場する人物の役割と性格までメモされているので、登場人物別にこの「ノオト」を分解してみます。

【菜穂子】女学校時代、自分は結婚問題は事務的に解決するのだと友達に言いはる。母と恋愛関係にあつた森於菟彦を軽井沢のホテルに訪ねる。母と不和になつてO村を去つてから三年後、不幸な結婚生活に入る。そんな孤独な日々の感想に、「夫はつめたいのではない。無気力なのだ。そして母の情熱に食はれてゐるのだ。」<sup>(6)</sup>その後、胸を患い、サナトリウムに入院する。夫そのサナトリウムに見舞いに行き、病室に一泊する。ある雪の日、菜穂子とつぜんサナトリウムを抜け出し、上京する。銀座裏の珈批店に夫を呼び出す。夫と種々話し合った後、ひとまずホテルに泊まつて、何も解決しないまま、翌日サナトリウムにもどる。

【明】菜穂子の幼友達。一高を卒業し、大学は建築科に入る。立原道造をモデルにしたといわれ、ロマネスクな傾向顕著。三村家を訪ね、菜穂子とその母と三人で愉しそうに對話する。けれども、夢みようとする彼、夢から覚めようとする彼女は対極的。他方、O村で病身の娘をかかえて、宿屋を営む、ある美しい寡婦への思慕はいよいよつのる。菜穂子の結婚後、O村へ冬の旅に出て、病を得て帰京。市立療養所に入り、春先ひとり淋しく死す。

【森於兎彦】北京で急逝する。菜穂子は森の遺した叙情詩を耽読し、森が彼女の母をいかに愛していたかを知る。そのため、母の死の前後から母に反抗的だったことを悔い、母恋しさに耐えず。

【菜穂子の兄】菜穂子宛ての手紙に、「お前は鎖がこはいのか。人間が自由になるのは、いひかへれば、眞に自分自身たりうるのは、實に結婚生活―即ち、平和な生活の中なのだ。奴隷生活をしてゐるのは獨身者だ。彼らは常に動揺し、危惧してゐる。」

【菜穂子の母】娘を信頼し、好意的な放任主義の態度をとる。しかし、菜穂子の結婚後、心痛のあまり脳溢血にて倒れ、他界する。

【黒川圭介】菜穂子の夫。母に食われるままになっている。母が傍にいて何でもしてもらふ癖がついているので、菜穂子を山中湖につれて行って、ホテルに泊まったときも一人でまごまごしている。彼女は黙ってそんな夫のするままにさせる。

【夫の母（姑）】娘（菜穂子）を無理にサナトリウムに入院させ、息子を再び自分の支配裡に屈服させる。

【村の或娘】すこし耳のとおい娘。〇村に静養中の明と親しくなり、氷室でいくどか逢い引きをする。けれども、その娘はけつきよくその村の評判のよい巡査と結婚する。

【おきぬ】〇村にて宿屋を営む。病める娘を手術してもらうために上京し、海軍病院に入る。明はしばしば見舞いに行く。一月ほど入院後、医者に見放されて、彼女ら落胆して帰郷する。

こうした「創作ノオト」によつて『菜穂子』に着手したのが、昭和九年。完成が昭和十六年だったのを考えると、当然この時期は

掘 辰雄 管見 上野英雄

掘辰雄がリルケと王朝文学に傾倒していた時期に相当します。ところが、意外にも『菜穂子』の下敷きになったのは、フランソワ・モリアックの『テレーズ・デスケイルウ』だとされている。そこで『テレーズ・デスケイルウ』と『菜穂子』を比較して読んでみると、ヒロインのテレーズと菜穂子、夫のベルナルと圭介の性格と立場の類似が明白になる。以下、具体的にテレーズの性格と立場から菜穂子のそれとの類似点を挙げてみる。

○テレーズは結婚のなかに避難の場所を捜していた。「実際の少女として、家庭的な娘として、地位を得てしまうことを、決定的な席を見つけてしまうことを、急いだのである。」<sup>10</sup>自分にも正体のわからない危険にたいして、安心しなかったのである。

○性格的にテレーズは「決して自分の快楽を外に見せない女、たいせつなことを話題にするのをきらう女」<sup>11</sup>である。

○テレーズは夫をきらつてはいない。ただ、自分の苦悩を一人で考えるために、たつた一人になりたい願いがはげしい。「夫がそこにいないでくれば、それでいい。」<sup>12</sup>

○「そんな目つきで私を見るの、いつになったら、やめてくれるの！」<sup>13</sup>とよく言われたことを、テレーズは覚えてゐる。

次にベルナルの性格と立場から圭介のそれとの類似点を挙げてみる。

○ベルナルにとつて大切なのは、家と世間体である。夫人との不和を世間に見られたくない。「お前が私の腕によりかかっているとこを世間の者に見せなければならん。」<sup>14</sup>

○世間では夫人が少し神経衰弱の気味だということを感じてい

る。「お前が一人でいるほうを望んでおり、僕がときどきあいに来る、ということになっている。」<sup>(15)</sup>

○ベルナールは家庭の枠に合わせて作られた人間である。「彼はわだちを必要とする。」<sup>(16)</sup>

○離婚しないまま、別居状態をつづけることについて、夫人が「あなたはこれから淋しくなりますわ。私はその場になくても、席を占めているのですもの」と言うと、そんなことよりも、男の子がいなくて、「家名が断絶するのが惜しい」とベルナールの本音が出る。

主要人物のこのような類似点を認めた上で、以下に小説『菜穂子』の梗概を要約してみます。

菜穂子と明は信州のO村で育った幼馴染である。明は七つのおとこ、両親を亡くして、O村の叔母の別荘で数回の夏休みを過ごす。たまにその隣の別荘の住人が三村家の人々だったので、三村家の娘で自分と同じ年の菜穂子と明は、テニスをしたり、自転車や遠乗りをしたりして遊ぶ。が、その頃からすでに、「本能的に夢を見ようとする少年」と「反対にそれ（夢）から目醒めようとする少女」の間柄にあつて、置き去りにされるのはいつも少年の方であつた。

ある夏の日、有名な作家の森於兎彦がとつぜん三村家を訪ねる。

三村未亡人、菜穂子、明との雨後の散歩は、すでに人生に疲弊したような作家に急に若返らせる亢奮を与えたのかもしれない。翌年の夏もまた、森は三村家を訪ねる。その頃から、三村夫人の周囲の何か悲劇的な雰囲気、明は好奇心を抱く。けれども、悲劇的な相貌は夫人だけではなく、娘の菜穂子にも現われているのに気づいたと

き、明の少年の日々は急に陰り出す。

今から二年前の冬、三村菜穂子は二十五歳で結婚した。相手の男性は黒川圭介といって、商事会社に勤務する世間並みの青年で、母と二人きりで亡父の遺した屋敷に地味に暮らしていた。菜穂子がなぜそんな世間並みの十歳も年上の男と結婚したのか。彼女の昔の友達の話はともかく、菜穂子自身の言葉によると、「それはその当時彼女を脅かしていた不安な生から逃れるためだった」<sup>(17)</sup>。彼女は他人の家庭のなかに「恰好の避難所」を求めたのである。そして一年近くはこれでよいと信じていた。が、その翌年の秋、彼女の母の三村夫人がとつぜん狭心症で亡くなると、菜穂子の結婚生活は急に落ち着きを失い出す。圭介の母は、娘がいままのままの生活に不満そうなのに気づき、一家の空気を重苦しくさせかねないことを怖れる。

そんな折り、菜穂子が夫といっしょに夕暮れの銀座に出たとき、幼馴染の都築明らしい人を見かける。明の方が先に彼女に気づいたらしく、「やつぱり菜穂子さんだ」と雑踏のなかで振り返る。互いに人波のなかに消えた姿について、印象深く、「何年ぶりかで見た菜穂子は、何か目に立つて憔悴してゐた」と明。「何かかう打ち沈んだ、その癖相變らず人懐きさうな、背の高い姿を見かけた」と菜穂子。

都築明は大学の建築科を卒業し、ある建築事務所勤務していた。

ある日、その所長が明に向かつて、君は顔色が悪い。無理をして身体をこわさないように。休暇を上げるから、田舎へ行つて一月でも二月でも静養して来てはどうか、とすすめる。田舎と聞いて、明はすぐ少年期の夏を過ごした信州のO村のことを考えた。そして、その村の牡丹屋という古い宿屋で休暇中の静養の世話になることに



する。牡丹屋の人たちは少年の頃の明のこともよく知っていて、深切に世話をしてくれた。とりわけ、主人の姉のおえふは若くして隣村のMホテルに縁づいたものの、どうしても性分が合わなくて一年位で離縁している。そのおえふに今年十九になるけれども七、八年前から脊髄炎で床にいたきりの初枝という娘のあったことは、今度の滞在ではじめて知った。こういう過去の美貌の女が、もう四十に近いだろうに、いかにも娘々した動作でまめまめしく働いている姿。明はこんな山国にはこんな女の人もいるのだと懐かしく思う。

明はほとんど村中を見て歩いた。すでに人手に渡っている叔母の別荘も、その隣りの三村家の大きな榆の木のある別荘も、釘付けになったままだった。ある日の散歩の途次、明は驟雨におそわれて、林の空地の藁葺小屋に駆け込む。が、その小屋には先に入って雨宿りしていた一人の娘の姿があったのに気づいて、明は驚く。「この小屋は一體何ですか？」<sup>(26)</sup>「氷室です」<sup>(27)</sup>。こんな会話を交わしているうちに、この娘は綿屋という屋号の家の早苗という少女であることが分かる。彼女は少し耳が遠いらしく、いつも小さい声で話す。その日から、この氷室のある林の空地が明の好きな場所になった。夕方近くなると、芹摘みからもどつて来る早苗がそこで明と立ち話をするのが、習慣になった。早苗の幼馴染だった初枝（おえふの娘）は十二の冬、小学校への行きがけに、凍結した雪の上に誰かに突き倒され、それがもとで今の脊髄炎を患ったのだという話も、明が氷室の前で早苗と逢い引きしたときに聞いた。明と早苗は二、三時間逢った後、別々に夕方の家路につく。そんな帰りがけに、明はよく、桑

畑のなかを一人の巡査が自転車に乗って来るのに出会った。その巡査が早苗への熱心な求婚者であることを知ったのは、ほどなくしてのことである。

ある朝、菜穂子は急にはげしく咳き込んで咯血した。夫の圭介は、今のうちにどこかへ転地させた方がよくないか、と母に相談する。母には、この頃何かと氣ぶつせいな娘を一時別居させて、以前のよう息子と二人きりになれる気楽さもあり、逆にそんなことをしては世間がうるさいという氣遣いもある。そんな母を医者が納得させ、菜穂子も転地先として、信州の八ヶ岳の麓の高原療養所を希望する。療養所の窓から山や森を眺めて、「此處こそは確かに自分には持つて来いの避難所だ」<sup>(28)</sup>と考えた。事実、こういう孤独で屈託のない生活のなかで、彼女は精神的にも肉体的にも奇跡のようによみ返って来た。六月に入ると、二十分の散歩を許された。山麓の牧場の方まで一人で散歩しながら、菜穂子は考えこむ。なぜ自分はこんな結婚をしたのだろうか？あのとときあんな抜きさしならないような気持ちになつて、こんな避難所を求めたことが悔やまれてならない。それでも今は、本意ながら人妻である。牧場の真ん中ほどにぼつんと一本の巨樹が立っている。その樹木は幹が二つに分かれて、一方の幹には青葉が簇がり、梢まで風に揺られて光っているのに、他方の幹は痛々しいまでに枯れて、苦しみ悶えているような枝ぶり。この巨樹を眺めながら、「私もあんな風に生きてゐるのだわ、きつと。半分枯れた儘で……」<sup>(29)</sup>

圭介の母は入院中の菜穂子と幾度か手紙を交わしていたが、六月末にとつぜん療養所に見舞いに来る。とはいっても、それは世間体

を気にした儀礼的な見舞いであつて、娘の病室にとどまるのを怖れている様子の中に、菜穂子はすばやく「虚偽的なもの」を感じ取る。夫の圭介が療養所の妻を見舞つたのは、二百廿日前の荒れ模様の日だった。「まあ、あなたでしたの？」とふり返つた妻に、「どうだ。あれからずつと好いんだらう？」と圭介。しかし、彼はそのとき「菜穂子の何か彼を憐れむやうな目つき」から思わず顔をそむける。「どうして此の女はいつもこんな目つきでしか俺を見られないんだらう」と訝る。その夜、風雨のなかで、圭介は付添人用の組立式のベッドを借りて、菜穂子の病室に泊まる。その夜半の対話のなかで、「……お前は家へ歸りたいとは思はないかい？」という問いかけに、菜穂子は思わず身を竦めて、「身体がずつかり好くなつてからでなければ、そんなことは考へないことにしてよ。」翌日の帰りぎわに、「後生だから、お前、そんな眼つきでおれを見る事だけはやめて貰へないか」と抗議の言葉を残して立ち去る。圭介を乗せた上り列車は、嵐にもまれながら、森林の多い国境を横切つた。その列車のなかで、圭介はとりとめもない思考力で三人のことを考え通す。いよいよ孤独の相を帯び出した妻のこと。妻のそばで自分以外の者になつたような気持ちで一夜を明かした自分のこと。そして、大森の家でまんじりともしないで自分を待ちつづけている母のこと。

おえふがO村から娘の初枝の病気の治療のために上京して来ている。そのことを聞いて、都築明が築地のその病院へ見舞いに行く。「有り難うございます」と、おえふはどこまでも生粋の山国の女だった。こんな場合に明にどう対したらよいか分からなそうで、いかにも懐かしそうに口籠もる。初枝は母親に似て、細面の美しい顔

だちをし、思ったほど養われてもいなかった。明はとつぜん、この初枝が彼の以前の恋人の早苗と幼馴染だつたといふ話を思い浮かべた。その早苗もすでにO村の若い巡査のところへ嫁いでいる。明は病院の玄関までおえふに見送られながら、ふと自分もこの母子と運命を共にすることだつてありうる、と胸に描いたりした。二カ月余りも病院で徹底的に診てもらつていたが、その効はなく、けつきよく医者にも見放されて、初枝はおえふといっしょに郷里に帰る。明は上野駅まで見送りに行つた。「御機嫌よう。どうぞ貴方様もお大事に」と別れを告げるおえふに、「僕は大丈夫です。事によつたら冬休みに遊びに行きますから待つてゐて下さい」と明。汽車の去つた後のプラットフォームで明は感慨に耽る。おえふにも初枝にも、さすがに何か淋しそうなどころはあつたけれども、世の中に絶望したような素振りはどこにも見られなかった。むしろ、O村へ早く帰れることになつたことで、安心した様子さえしていたではないか。ところが、安心できるどころをどこにも持たない自分は、どうすればよいのか？「おれがこれまでに失つたと思つてゐるものだつて、おれは果してそれを本気で求めてゐたと云へるか？ 菜穂子にしる、早苗にしる、それからいま去つて行つたおえふ達にしる、……」

十二月のある雪曇りの曇つた日、明がとつぜん療養所の菜穂子を訪ねる。「まあ、明さん」と菜穂子が咎めるやうな目つきで明を迎えたのは、この冬の寒気のなか、明がはげしく咳き込みながら訪れたからである。明は一か月の休暇をもらつて、どこいうあてもない冬の旅をしながら、今後の身の振り方を考えようとしたのである。「お風邪でも引いていらつしやるんぢやない？ それなのに、こ

んな寒い日に旅行なんぞなすつてよろしいの？」明はちよつと喉をやられているだけだから、大丈夫だという。互いにやや落ち着いてから、菜穂子の口をついて出た言葉。それは「明さんは羨ましいほど、昔と變らないやうね。……でも、女はつまらない、結婚するとすぐ變つてしまふから。……」少女時代の菜穂子の勝気な性格を知りつくしていたので、「あなたでもお變りになりましたか？」と問い返す。明はそれからしばらく瞑想し、菜穂子さんだつて、昔は僕の夢がちなのを嫌つてばかりいたが、やつぱり自分だつて夢をもっていたんだ。……それがこんな勝気な人なのだから、心の底の底にその夢をとじこめたまま、誰にも打ち明けるのを嫌つたのだ。明が立ち去つた後の病室で、「冬空を過つた一つの鳥かげのやうに、自分の前をちらりと通りすぎただけのその儘消え去るかと思えた一人の旅びと」。(46) その不安そうな姿がいよいよ深い痕跡を菜穂子の心に刻む。

半病人の都築明はさしずめO村まで引き返し、そこで暫く休養してから、この旅をつづける心算でいた。そして、O村ではまたしても牡丹屋の人たちの世話になる。おえふが初枝の看病の合間に、明に葉などを進めてくれる。「初枝さんはこの頃どうですか？」と訊ねると、「矢つ張、此の土地の氣候が好いのですわ。——明さんもこんどこそはこちらですつかり身體をおこしらへになつて行くこと好いと、皆で毎日申して居りますのよ」。(48) 明はおえふの少し老けた顔を見ながら、この四十過ぎの女にいままでとは違つた情の湧き出るのを覚える。

雪の烈しく降りしきる日、菜穂子は矢も楯もたまらなくなつて、

療養所の裏口から抜け出す。その日は東京も大雪だった。「いきなり新宿駅から電話をかけて寄こすなんて驚くぢやないか」。(49) 菜穂子にしてみれば、こんな吹雪の日に向こう見ずに上京した彼女を見て、夫がどんな顔をするか、それに一生を賭けるつもりだったのである。ところが、銀座裏の喫茶店での会話はいつもの習慣どおりになって、「母さんは病氣なんだ」。(50) 大森の家に泊まるわけにはいかない、と圭介が明言する。と、菜穂子は、「さうね、私が悪かつたわ。私、これからすぐ歸るわ」。(51) 圭介は戸惑つたあげく、麻布に小さなホテルを知っていたので、今晚はそこに一泊して明日療養所にもどつては、と提案する。菜穂子もこれを了解したので、圭介は彼女をそのホテルへ案内する。夫をホテルのうす暗い玄関に見送つた後、寢室の冷たいガラスに自分の顔を押しつけたまま、ぼんやりと夕暮れの雪景色に眺め入る菜穂子。それは譬えようもなく悲劇的な相貌を帯びた菜穂子の姿である。

以上で筆者は『菜穂子』の梗概を詳細すぎるほどにまとめてみました。この小説の構成が輻輳しているのみならず、登場人物も複雑に絡み合っているのです。内容の要約がこんなに長くなるを得ませんでした。しかも、『菜穂子』創作ノオト、『菜穂子』あとがきと、『菜穂子』覺書<sup>(52)</sup>によると、作者は『物語の女』(一九三四年)に登場する娘の菜穂子が成長し、人妻としての菜穂子としての苦惱までを描いて、長編小説としての「大・菜穂子」を意図していたことが窺えます。その意図について、「私は『物語の女』に」次いでその續編として、さういふ婦人を母とした、新しい世代の娘を描い

てみたかった。母と異つて、もつと現実的な生きかたをしようとしてつづ、自己のうちに潜む母とおなじやうなロマネスクな氣もちに苦しめられ出すやうな、一人の若い女を描かうと思つたのである。」

(『菜穂子』あとがき)

こうして漸く七年後の一九四〇年の冬、作者は『菜穂子』を脱稿しました。そして、この作品の母胎となつた『物語の女』を再び読み返してみたとき、作者は両作品の間がどうもしっくりと繋がってないのに気づく。「二つの作品の間に、どうしても菜穂子とその母との悲劇を相對立させながら、しかもそれを自然におのづから連鎖せしめるやうな一つの環をどうしても加へなければならぬ事を感じた」(『菜穂子』覺書)。そこで作者は、その「環」に相当する部分として、『物語の女』の第二部を書き、さらに旧作『物語の女』にも若干の修正を加えて、新たに『楡の家』という小説を発表する。『菜穂子』発表の翌年(一九四一年)九月(『文学界』)のことである。したがって、『楡の家』は二部から成る小説ですが、その第一部は旧作『物語の女』とほとんど同じ内容ですので、これについては何も触れず、第二部の内容について以下にその梗概を述べてみます。

第二部は第一部と同様に、菜穂子の母である三村未亡人の日記で始まる。一九二八年九月二十三日、O村にて書かれた日記ですが、自分の死後、娘の菜穂子に発見され、読んでもらうことを意識して書かれたものです。したがって、作品中の「私」は三村夫人、「お前」は菜穂子、「あの方」は森於菟彦を指しています。

森さんがとつぜん北京で逝く。一年前、何者かから逃れる

ように支那へ赴かれてから、あの方は私にも二、三度お手紙を下さつた。それはいづれも、人生に疲れ切つたやうな、そういう自分を自嘲するやうな、いかにも痛々しいお便りばかりだつた。作家森於菟彦の急逝を報じた新聞を見るなり、私は胸を押しつけられ、氣味悪いほど冷汗をかいて、長椅子に倒れていた。思えば、それが私の狭心症の最初の発作だつたのだろう。

あの方がもうお亡くなりになつた上は、あの方のことについて前と心をひらいて語り合うこともできる。森さんが私に求めたのは、年上の女性としてのお話相手でした。どこまでも「一個の女性としての相手」を望まれたのが、いけなかつたのです。それが私をだんだん窮屈にさせ、お前との不和の原因にもなりました。母としてはなく、女として私はあの方の崇高なものに信従しました。

菜穂子はしかし、ああいう方は敬遠したいという。「なんでも御自分のなさりたいと思ふことをしていいと思つてゐるやうな天才なんでいふものは、私は少しも自分の側にもちたいとは思つてゐません」(58)。別荘の暖炉を囲んで、母と娘は縁談の話に入る。これまでも二、三度お前の縁談について話はもちこまれたが、森さんが北京で亡くなられたときだったので、落ち着いて話を聞いていられたかつたのです。今度の菜穂子の縁談の相手の人は、一人息子で母親と二人きりで生活し、年齢もだいぶん行つてゐる。だから、「なんだか、話の様子では母親に負けてゐるやうな氣がしますわ」と母が言うと、「さういふおとなし過ぎる位の人の方がかへつて好きさうね。私なんぞのやうに氣ばかし強いものの結婚の相手には……」(60)。

そして更に、菜穂子はこの別荘へ来る前にこの縁談の承諾をして

来たのだと言う。「お前が私に對する反抗的な氣持からあまりにも向こう見ずな事をしようとしてゐるのを断然お前に諫止しなければならぬ」と母は思った。そんな結婚をすればお前は必ず不幸になる氣がしてならないからである。こう考えてから、楡の木の葉のさらさらする音に快感を感じていると、自分の心臓がはげしくしめつけられるのを感じた。

ここで母の日記は中断している。再度の狭心症の發作に襲われて、ついに不歸の人になつたのである。この日記は、こうして意識を失つた母の傍で、書きかけのまま開かれていたのを爺やが見つけたのである。菜穂子はその数カ月前にすでに母の意に反して結婚してしまつていた。母の没後半年して、菜穂子をはじめ母の日記を読んだ。それは、「母が氣づかつたやうに自分の前途の極めて困難であるのを漸く身にしみて知り出してゐた折でもあつた」<sup>(62)</sup>。

## 注

- (1) 「堀辰雄全集 第七卷」九五ページ。  
 (2) 「―の―」一〇八ページに既出。  
 (3) 「堀辰雄全集 第七卷」二五、九五ページ。  
 (4) 「―の―」一〇、一一四ページに既出。  
 (5) 「堀辰雄全集 第七卷」二六七、二七三ページ。  
 (6) 同右 二七〇ページ。  
 (7) 同右 二六八ページ。  
 (8) 小久保實「堀辰雄論」(一九六五年 麥書房) 一三ページ。  
 (9) モーリヤック作・杉捷夫訳「テレーズ・デスケイルウ」(新潮文庫)  
 (10) 同右 三七七ページ。

- (11) 同右 四四ページ。  
 (12) 同右 五一ページ。  
 (13) 同右 一五〇ページ。  
 (14) 同右 一一八ページ。  
 (15) 同右 一三五ページ。  
 (16) 同右 一六六ページ。  
 (17) 同右 一六七ページ。  
 (18) 同右 同ページ。  
 (19) 「堀辰雄全集 第七卷」二七七ページ。  
 (20) 同右 同ページ。  
 (21) 同右 三〇ページ。  
 (22) 同右 同ページ。  
 (23) 同右 二五ページ。  
 (24) 同右 同ページ。  
 (25) 同右 三一ページ。  
 (26) 同右 三五ページ。  
 (27) 同右 同ページ。  
 (28) 同右 三九ページ。  
 (29) 同右 四五ページ。  
 (30) 同右 四七ページ。  
 (31) 同右 五〇ページ。  
 (32) 同右 五一ページ。  
 (33) 同右 同ページ。  
 (34) 同右 同ページ。  
 (35) 同右 五三ページ。  
 (36) 同右 同ページ。  
 (37) 同右 同ページ。

- (38) 同右 五七ページ。  
 (39) 同右 六五ページ。  
 (40) 同右 同ページ。  
 (41) 同右 六六ページ。  
 (42) 同右 六七ページ。  
 (43) 同右 六九ページ。  
 (44) 同右 七〇ページ。  
 (45) 同右 同ページ。  
 (46) 同右 七二ページ。  
 (47) 同右 八一ページ。  
 (48) 同右 同ページ。  
 (49) 同右 八七ページ。  
 (50) 同右 八八ページ。  
 (51) 同右 同ページ。  
 (52) 「堀辰雄全集 第八卷」一五八―一六〇ページ。  
 (53) 「堀辰雄全集 第七卷」二六四―二六六ページ。  
 (54) 「堀辰雄全集 第八卷」一五九ページ。ただし、( ) 内は筆者注。  
 (55) 「堀辰雄全集 第七卷」二六六ページ。  
 (56) 「堀辰雄全集 第七卷」一三一―一六八ページ。  
 (57) 同右 一六三ページ。  
 (58) 同右 一六四ページ。  
 (59) 同右 一六〇ページ。  
 (60) 同右 同ページ。  
 (61) 同右 一六六ページ。  
 (62) 同右 一六七ページ。

## 信濃の人びと

小説『菜穂子』に登場したおえふを主人公にして、昭和十八年、堀辰雄は「新潮」一月号に小説『ふるさとびと』<sup>1)</sup>を発表します。そして、この作品の着想と完成後の感想を、作者は左記のように述べる。

「『ふるさとびと』はそれらの作品（『楡の家』と『菜穂子』）と或つながりをもたせつつ、一人の田舎の女を描かうとして、これも長いこと考へてゐたものだが、遂にその素描のやうなものしか出来なかつた。しかし、いまでもまだ、それを一幅の精密なタプロオに仕上げたいといふ慾求は私から去らずにゐる。」<sup>2)</sup>（『堀辰雄作品集第五』『菜穂子』あとがき）。この慾求はついに果たせなかつたのですが、素描のままでも十分に小説としての体を成していますので、先ずこの作品の梗概を紹介します。

おえふが十九の春に萬ホテル（屋号の実名はマン・ペイ・ホテル）に嫁いで一年、生家で初枝を生むと、そのままどうしても嫁ぎ先にもどらない。「理由はなんとも云はなかつた」。それをいっても、誰にも理解してもらえそうになかつたから、理由を言わなかつたのだという。けれども、この小説には、おえふの生まれた牡丹屋（屋号の実名は油屋）の血筋と盛衰の歴史についても、嫁ぎ先の萬ホテルのそれについても、詳細に書きこまれ、こういう古い山村では何といても家柄がものをいっていたという。萬ホテルは萬屋という小さな旅籠屋の長男が借金して、一代で築いたホテルである。牡丹屋の方は隣りの村の本陣。この家柄の差はおよそ太刀打ちできる間隔でない。それだからこそ、萬ホテルの当主がおえふを長男の嫁にと

懇望した理由が解せる。これはいわば政略結婚だったのである。

おえふが出戻りしてから、萬ホテルの長男の耕作は草津の有名旅館の評判娘を嫁にした。が、それから一年もたたないうちに、その嫁も離縁になる。そんな噂を聞いても、おえふはもうなんとも思わなくなっていた。急に勝気な女になって、背なかにした初枝をあやしなげに、店さきでかいがいしく働く姿。それはいかにも屈託のないものだった。(そして、これは『楡の家』のなかにも描写されていますが) ある夏の日ざかりのなかで、牡丹屋の前の街道に急に人影が見えた。それは三村夫人、娘の菜穂子と森於菟彦の三人づれだった。「三村夫人はふと日傘の中からおえふと目を合わせると、何か見られたくないやうに、無言で會釋をして、すうつと通り過ぎていった。おえふはさういふ夫人の容子に何か異様なものを感じた」。

おえふはそれから何年たつても若く、美しかった。しかし、彼女の背負わされた運命は、年とともに増大し、多様化する。(これは『菜穂子』のなかにも描写されていますが) 娘の初枝が十二の冬、村の小学校へ行きがけに、凍てついた雪の上に誰かに突き倒されて、それがもとで脊髄を患う。初枝は自分の病気に怖じ気づき、寝たきりになっている。自分の娘がこうして廃人同様になってゆくのを、おえふは自分の力ではどうしようもなく、その心痛には量り知れないものがある。

老人(おえふの父)がその冬、一と月ほど煩つただけで死んでいった。この草平という老人はそもそも、牡丹屋の先代の実子ではなく、牡丹屋の先代が幼い子を残して亡くなったとき、牡丹屋の血縁のなから後見として後継を頼まれていた。そういう因縁もあって、老

人の死後、思いがけない難題がおえふたちの前途に生じた。つまり、この老人に牡丹屋を預けたのは一代限りの約束だった、と本家の方で言い出したのである。おえふたちに見れば、本家はとうにK駅前到店を出して繁盛しているし、旧牡丹屋は自分たちのものと思ひ込んでいたので、寝耳に水の話だった。

折も折、おえふの弟の五郎がおしげという芸者を家内にして、同じ牡丹屋におしげを働かせていた。おしげはそんな芸者稼業をしていた女にも似ず、たっつけ姿でおえふといっしょに働き、こんな山奥でなりふり構わず働いているほうが、東京の女にはかえって何の気苦労もなくいいように思えた。ところが、その年の梅雨さき、五郎がとつぜん足を患い、リウマチと診断される。

「初枝はもう二十になる」。(6) 考えてみると、おえふはいまの初枝の年頃にあんな不幸な結婚をさせられてしまつて、もう四十である。夏休みになると、東京から学生たちがこの牡丹屋に静養に来る。その学生たちが牡丹屋の最後の日のことを勝手に話し合っているのが、おえふの耳に入る。それは牡丹屋がこの先、何年つづくかという話題である。

いまこそ弟の病気のおかげで本家との問題が小康を得ているものの、いつまたそれが再燃して、おえふたちを脅かすか分らない。もしかして自分たちがこの家を手放す羽目になったりするよりも、その前にこの牡丹屋がひとりで崩壊して自分たちもいっしょに死ねたらいい。おえふは初枝を見つめながら、こんな憂慮の気持ちに襲われる。

小説『ふるさとびと』はここで終わっていますが、油屋をめぐる本家と追分のいざこざについては後日譚がありまして、堀辰雄の死後に発表されたノオトに左記の記述が見られます。

「そのいざこざのまま、追分の油屋が火事で焼失した。いざこざはそのあとまで続いた。その焼跡に追分の方では建てるといひ、本家の方ではそんなことはして貰ひたくない、焼けのこつた倉と離れは自分の家のものの方だ、さう云ひ、火事の翌日から焼跡にきて、倉の焼け残つた品物を片づけ出し、それを離れにしまつた、そして油屋の方には一切手を出させなかつた。――追分の方では、焼跡の前の空地へ新しい建物を建て、そこで営業し出した。焼跡は草茫茫として、礎のみ残り、その礎の陰をもとは用水だつた小川が昔のままのせせらぎの音を立てながら流れてゐる」(「輕井澤 I」)。この油屋の火災は昭和十二年十一月十九日の昼火事として、たまたま堀辰雄も立原道造や野村英夫とともに逗留していたので、思いもよらぬ被災者になります。その火災時の模様について、堀辰雄は同年同月二十二日付、佐藤恒子宛てに左記の「封書」を書きます。

前日(十一月十八日)輕井沢の川端康成さんの別荘に泊めてもらつて、「翌十九日三時ごろの汽車で追分に歸つたら驛で油屋が火事のことをきき驚いて駈けつけたら、もう油屋はあらかた焼けてしまつてゐたのです。何ひとつ持ち出せなかつたのはしかし僕ばかりぢやなく、油屋の人達さへ病人を出すことに氣をとられて位牌さへ取り出せなかつたほど火の手が早かつた由、あの大きな建物に火がついたと思つたら家全體が殆ど一どきに燃え立つたさうだけど、何しろ家が古いので木が枯れ切つてゐたせいなんでせうね。火事の起りは隣

家のお上さんが豚小屋の前で豚にやる餌を煮てゐた火の不始末からだとか、……僕の外に油屋にゐたのは立原君、野村君、――立原君などは二階にゐて逃げ遅れて危く焼け死ぬ所だつた由、……」

ところで、おえふが離縁した蔦ホテル(マンペイ・ホテル)の後はどうなつたろうか。『四葉の苜蓿』(昭和十六年「新女苑」十月号)は堀辰雄の小説ではなく、エッセイですが、このなかにそのホテルが廃業して人手に渡つた様子が描かれています。このホテルの裏の塀にそつて、村で一番美しいと言われるさるすべりの木が立ち、夏ごとに真っ白い花を咲かせる。ホテルではその木は昔からホテルのものだと言ひ、道ひとつ隔てた便利屋では自分の家のものだと言ひ張る。双方譲り合う気配もなく、もう十年もどちつかずのまま、美しい花が咲きつづいてゐた。

クリスマス前の前日、私(堀辰雄)はこの村がもう雪に埋まり出す頃かと思つて、東京からやつて来たのだが、このホテルはいま休業している、と無愛想に断られる。そのため、私は隣りのO村の懸意な宿屋に泊まつて、そこで聞いた話によると、K村には先頃から疑獄事件が起こつて、村長以下、村の顔役たちが挙げられている最中で、そのホテルの主人もそのなかの一人だつた。ホテルの買い手は、ベッドや家具類は競売にして、建物だけをよそへ持つていつて工場に直すつもりだとか。

この翌年、ホテルの建物はすっかり取り払われていた。が、村で一番美しいさるすべりの木は、そのまま引っこ抜かれもしないで、今夏も真っ白い花を咲かせていた。その木の下の公然と便利屋の荷



車の置場になって、その車の上に匂いのいい白い花がぼたりぼたりと落ちていた。本当に何が幸いするのか分らない。

『楡の家』と『菜穂子』のなかに、三村夫人の別荘とその別荘番の爺やが登場しましたが、その別荘と爺やがその後どういう運命をたどったかについて、堀辰雄はほとんどフィクションのない小説『朴の咲く頃』<sup>(10)</sup>（昭和十六年「文芸春秋」一月号）を書きました。その「創作ノオト『別荘番』」には、「K夫人が私にしてくれた話。（一九四〇年八月六日夜）」と記述されていますが、K夫人とは誰のことなのか、判然としません。作品のなかでは、K夫人などまったく無縁で、三枝夫人の別荘番の爺やの息子、「不二男さん」が三村夫人（この小説では「日向夫人」）の別荘の売却にいたるまでの経緯とその別荘番の爺やの死にいたるまでの話を、私たち（堀辰雄夫妻）につぶさに語って聞かせる文体になっています。これは私と妻がK村にはじめて来た画家の深澤さんを案内しながら、その夏借りることにした別荘を見に出かけたとき、不二男さんが説明してくれた話ですが、日向夫人の別荘番の爺や夫婦は、その別荘が売りに出されても、もとどおり奥様のために働いていた。いま売りに出している別荘が売れたら、少しはまとまった金を分けてやる約束があったからのようです。最初は一萬圓位で手放したいというのが日向夫人の希望でしたが、なかなか買手がつかず、やっと五年前に関西のある実業家が、仲介した奥様の甥を相手にさんざん値切って、五千圓で買収した。これでは約束の金をやれなくなっただけでなく、爺やたちの住んでいた小屋も夏の借り手が決まっていたので、どうするの

かと思っていた。と、ある日、爺やたちは取り壊した別荘の古材木や古ブリキなどを分けてもらって、裏の五坪ほどの空地に自分たちの手で掘建小屋を建てた。

最初のうちはその掘建小屋で爺や夫婦はおとなしく暮らしていたらしい。が、飲んだくれで因業な爺やですから、婆さんの方からも愚痴が出る。そうすると爺やが怒り出して、夫婦喧嘩になる。隣の別荘を借りていた外人の家族など、余りにも激しい喧嘩に怖じ気づいてしまつて、予定を繰上げて別荘を引きあげる。九月のある朝、婆さんが風呂敷を肩にぶらさげ、蝙蝠傘を手にして、三枝さんの奥様を訪ねる。とうとう辛抱しきれず、爺やと別れて、自分の先夫の娘のところへ行くのだと言う。お前は良い娘があるんだからそこへ行け、おれひとりだけならどうとでもして暮らしてみせる、と爺やも言う。

翌年の冬、そろそろ冬籠もりしだした時分のこと。うち（不二男）の爺やや三枝さんの別荘番をしていて、日向夫人の別荘番の爺やとは仲違いしていたのに、不思議なこともあればあるもので、夜中に日向の爺やの小屋を訪ねている。不二男が事の真意を問いたですと、「病気だもんで、わつしやちよつくら見舞つてやつてるんだあ」<sup>(11)</sup>。日向の爺やはどうも胃痛らしい。それにもう寝たきりで、再起ののぞきもない。冬になるとK村には一人の医者もいない。その年の暮れ近く、雪に埋まった掘建小屋のなかで、とうとう爺やや一人つきりで死んで行った。日向さんの甥ごさんが葬儀万端をなさったが、別れた婆さんの方からは誰も見えなかった。

不二男さんはここで爺やの死を語り終わった。因みに、私（堀辰

雄)が日向さんの別荘のその後のことを訊ねると、不二男さんはあの実業家の建てた「化物屋敷」のような石づくりの、高い建物を指さす。その主がひと夏、あそこに若いお妻さんを連れて来ていたが、翌年にはその主が急逝して、現在はその息子さんの所有になっていくとのこと。

この話を聞いた晩、私(堀辰雄)が宿の部屋で妻と深澤さんに語った感想は、「その孤獨になつて死んだ爺やだつて、それから此處んちのおとなしさうな爺やだつて、この村へ渡つて来るまでは何をしてみたか誰も知らない。—さういう氣心の知れないやうな他所者が多いから、村の人達だつてあまり附き合ひたがらないし、自然何處の別荘番も冬なんぞになるとわれわれの考へもつかないやうな孤獨な暮しをしてゐるらしい」<sup>(15)</sup>。

## 注

- (1) 「堀辰雄全集 第七卷」二二二—二二六ページ。  
 (2) 「堀辰雄全集 第八卷」一六四ページ。ただし、( ) 内は筆者注。  
 (3) ( ) 内は筆者注。『楡の家』(堀辰雄全集 第七卷) 所載) については本稿 一 ページ参照。  
 (4) 「堀辰雄全集 第七卷」二二五ページ。  
 (5) ( ) 内は筆者注。『菜穂子』(堀辰雄全集 第七卷) 所載) については本稿 一 ページ参照。  
 (6) 「堀辰雄全集 第七卷」二二二ページ。  
 (7) 「堀辰雄全集 第八卷」二四三—二四四ページ。  
 (8) 「堀辰雄全集 第九卷」一〇六ページ。  
 (9) 「堀辰雄全集 第七卷」一一八—一二六ページ。

- (10) 「堀辰雄全集 第七卷」七一—二四ページ。  
 (11) 「堀辰雄全集 第八卷」二九六—二九八ページ。  
 (12) 同右 二九六ページ。  
 (13) 「堀辰雄全集 第七卷」二二二ページ。  
 (14) 同右 同ページ。  
 (15) 同右 一三三ページ。

## 大和への思慕

昭和十六年十月、堀辰雄が奈良をはじめ、京都、近江まで旅行して、『曠野』執筆のための準備をしたことについて、筆者はすでに述べました<sup>(1)</sup>。これはしかし、堀辰雄の三度目の大和旅行でして、これ以前に昭和十二年、十四年。これ以後には同年(昭和十六年)十二月、昭和十八年の三月と五月。都合六回も大和へ旅行している。

「この數年間、私はしばしば大和のはうへ旅をした。さうしてそのをりをりに書いた日記や手紙や小品を蒐めて、この小さな書を編んだ。さうしてそれへ『大和路』といふ題を無造作につけておいた儘にしてあつたが、いま上梓するにあつて、もうすこし私のものらしい、さうしてその古い、なつかしい大和への思慕の表象として、もうすこしintimeな『花あしび』といふ題を選ぶことにした。」<sup>(2)</sup> 『花あしび』後記<sup>(2)</sup>。

したがって、『花あしび』(青磁社版)が当初、「婦人公論」に発表されたときの表題は『大和路・信濃路』であり、角川書店刊「堀辰雄全集 第八卷」にも後者の表題で収録されている。具体的に分

類すれば、「十月」<sup>(3)</sup>、「古墳」<sup>(4)</sup>、「辛夷の花」<sup>(5)</sup>、「淨瑠璃寺の春」<sup>(6)</sup>と「死者の書」<sup>(7)</sup>が『大和路』に所屬し、他の三編は『信濃路』に屬する。そこで筆者は右記の五編と旅先からの書簡とを併せて、堀辰雄の六回の大和旅行を以下に逐次振り返ってみる。

堀辰雄がはじめて大和に遊んだのは、昭和十二年の晩春から初夏にかけて、京都に一月ばかり滞在したときのこと。本来の目的は、大山定一などリルケの好きな友人が京都に多いので、この人たちに会ったり、京都独逸文化研究所を訪ねて、リルケの話を楽しむことであつた。このとき百万遍の龍見院の寺のはなれを借りて逗留し、六月十六日付、立原道造宛てに、「大原の寂光院へ行つて来たがそれが身體に障つて半病人みたいになつている」とへはがき<sup>(8)</sup>を書き、また、七月六日付、葛巻義敏宛てに、「大和の二三の古い寺、嵯峨や大原のあたり、それから町の中では堀河邊のうすぐらい感じなどが印象が深い」と書いている。後日の回想記としては、

「そのをり萬葉集などときどき讀んでみてゐたが、或る日、ふいに思ひ立つて、ひとりで奈良へ出かけ、新薬師寺の門から新緑の高圓山を眺めたりして、一種の満足を得た。その歸りみち、高畑の古びたついで道を通り抜けてゆくうちに、おもひがけず一めん白い茅花<sup>(9)</sup>が微風になびいてゐる小さな原へ出たときの、一瞬の、目もさめるやうな心もちも、その最初の日の忘れ難いものの一つだつた。それからまた數日して、私は唐招提寺をおとずれ、夕がたその松林のなかを歩きながら、いままでにない心の昂揚を覺えた。」<sup>(10)</sup>（『花あしび』後記）

二度目の大和路巡りは昭和十四年の五月、当初は神西清との二人旅でしたが、神西が一足先に帰京し、堀辰雄は一人だけでなお二、三日、奈良に留まる。奈良市日吉館に逗留し、五月十二日付、堀多恵子宛のへ絵はがき<sup>(11)</sup>に、「きのふは奈良の町で一日を過した。三月堂や新薬師寺といふのを見て歩いた……けふは秋篠寺や西の京（薬師寺、唐招提寺など）を歩く」とあり、翌十三日付、同夫人宛てのへ絵はがき<sup>(12)</sup>には、「けふは疲れたから一日休息する。あすは法隆寺行。そしてあさつてから一日泊りで飛鳥地方を歩く」と書く。そして、その翌十四日付、同夫人宛のへはがき<sup>(13)</sup>には、「神西は十七、八日頃歸る。僕は神西のおつきあひで古佛ばかり見て歩き、まだ大ぶ見たいものを（大和の村々の風物）見てゐないので、もう四五日こちらに止まらうかと思ふ」<sup>(14)</sup>。そして、回想記によると、

「最後の二三日だけ、私ひとり残つて、好きな萬葉の歌などを口ずさみながら、ぼんやりと大和路を歩いた。そのをり、夕がたになると、遠くの空にくつきりと見えだす<sup>(15)</sup>上山の神々しい姿を見やつては、釋超空さんの『死者の書』の一節など鮮やかに思ひ出したりしてゐたが、とうとう最後の日になつてその麓の當麻寺まで往つて來たりした。」<sup>(16)</sup>（『花あしび』後記）。

釋超空の小説『死者の書』について、筆者はすでに言及しましたが、この旅の印象を折り込んで、「主」と「客」の対話体のエッセイが『死者の書』として、昭和十八年「婦人公論」八月号に発表される。この対話の「客」はもちろん堀辰雄ですが、「主」は京都に在住するドイツ文学者で、大山定一か誰か、ゲテテ文学者です。とい

うのは、堀辰雄がこうして大和路を苦勞して歩いてまわっても、自分にはまだ古代の研究が身につけていない。それだから、なかなか古代の小説に取りかかれない、と言うと、「主」はゲーテを引き合いに出して、「自分（ゲーテ）はギリシャ研究のおかげで『イフィゲニエ』を書いたが、自分のギリシャ研究はさぶる不完全なものだった。もしその研究が完全なものだったら、自分の『イフィゲニエ』は書かれずにしまつたかも知れない」というゲーテの言葉を引用して、「なるほどね」と「客」を首肯させるからです。『死者の書』に登場する二上山とその麓の當麻寺を仰ぎ見たときの印象について、「客」は「主」に左記のように話す。

「僕ははじめて大和の旅に出るまへに、あの小説（死者の書）を読んだ。あのなかに、いかにも神秘的な姿をして浮かび上がつてゐる葛城の二上山には、一種の憧れさへいだいて来たものだ。さうして或る晴れた日、その麓にある當麻寺までゆき、そのこごしい山を何か切ないやうな氣もちでときどき仰ぎながら、半日ほど、飛鳥の村々を遠くにながめながらぶらぶらしてゐた。」（『死者の書』）。

三度目の大和路巡りは、昭和十六年十月十日から二十九日まで。この旅先から多惠夫人に宛てた手紙をもとに、後日書き足しを施し、これをエッセイ風の紀行文にまとめたのが、『十月』（昭和十八年）婦人公論「一月、二月号」でして、これが小説『曠野』の創作の基礎をなしたということについて、筆者はすでに述べました。何分、創作の仕事を抱えた旅行ですから、古代美に心を潤すだけの旅行とは違って、一日も無駄に過ごすわけに行きません。その旅行がどんな

ものであったか、多惠夫人宛の実際の手紙と『十月』のなかの手紙とを併せて、考えてみる。

先ず奈良ホテルに到着し（十月十日）、ここを根城にして見物して歩いた所を順次たどつてみると、十月十一日…新薬師寺、唐招提寺。十二日…佐保路、海龍王寺、歌姫村。十三日…博物館（埴輪、飛鳥佛の彫刻、阿修羅王の像を見物）。十四日…秋篠寺（伎藝天女の像を見物）。十五日…京都の丸善、圓山公園、獨逸文化研究所、出町柳の古本屋（Louis de Laubeのソネット集を買ふ）。十六、十七日…終日ホテルで小説の構想を練る。十八日…京都の古本屋で「今昔物語」を買ひ、ホテルで折口博士の「古代研究」を読む。十九日…奈良萬葉植物園（戒壇院の松林）、三月堂。二十日…河内の國高安の郡。二十一日…博物館、東大寺、戒壇院。二十二日…ホテルで終日小説を考える。二十三日…法隆寺、「斑鳩物語」（虚子）の宿屋。二十四日…高畑。二十五日…博物館、高畑。二十六日…京都（甲鳥書林）、法隆寺、斑鳩の里。二十七日…法隆寺（夢殿の観音を見る）、奈良ホテルを立って京都へ。二十八日…琵琶湖ホテル泊。二十九日…夜七時東京着。

この二十日ほどの奈良ホテル滞在中に、夫人に送らせた本は、「希臘悲劇集」、Paul Claudel: "La jeune fille Violaine", André Gide: "La Porte étroite" その他。旅先で買った本は、「今昔物語」、「古代靈異記」、ルイズ・ラーベの「詩集」など。当初から持参したと思える本は、「伊勢物語」、「萬葉集」、折口信夫の「古代研究」、クロオデルの「マリアへのお告げ」など。いずれも堀辰雄の書簡と『十月』のなかに具体的に挙げられた書名です。

堀辰雄は二十日近くも大和に逗留し、萬葉集に縁のある諸方を巡り、萬葉気分を心底に醸し出すことよって、「古めかしい物語」の創作を構想したわけです。そのため一生懸命に小説を考えたけれども、どうしてもうまく行かない。「天平時代の建物や彫像の立派なのを身近かに感じてみると、どうも自分の書かうとしてゐるものが惨めなものに思へてきてしかたがない」(十月二十四日付、堀多恵子宛へ封書)。ところが、その翌日の同夫人宛のへはがきには、「二十四日夜、夕方高畑(ここは古い崩れた築地などの多い好いところだ)の邊を尾花の中を歩きながら、新しい小説のテーマを考へた。何もかも僕の心にぴつたりときた。昔の男の氣もちも、女の氣もちも、まだ我々の中に生きてゐるのがまざまざと感ぜられた。これならば好い。このまま小説の中へはひれたら僕はやはり下書きだけでもすつかり書き上げて歸る」(十月二十五日付、堀多恵子宛)。この前夜、堀辰雄が「今昔物語」の中にある或不幸な女の話だが、これならお手のものなので書けさうである。こんやもう一晚、この短編を考へてみる」(十月二十四日付、堀多恵子宛へ二通目の封書)と漏らししていることを、私たちは合わせて考えなければならぬ。ともかく、小説『曠野』の構想は成ったのです。そして、十月二十七日、琵琶湖ホテルに宿泊し、この小説の結末、「あの不しあはせな女がこの湖のほとりでむかしの男と再會する最後の場面」を考へてから、東京にもどる。

この年の十二月一日から三日まで、僅かに三日間の奈良旅行をして、これが堀辰雄の四度目の大和路巡りになる。「私は、こんどは瓶

原とか山の邊の道などといったところを歩き、それから三年まへの初夏の日に歩いた飛鳥の村々をもついで冬の花のなかに見てまはつた。『古墳』はそのをりの旅のたよりである」(『花あしび』後記)

そこで『古墳』(昭和十八年「婦人公論」三月号)についてですが、これは三年前に一緒に旅した了兄(神西清)に宛てて、十二月四日、奈良ホテルから差し出された手紙の文体のエッセイです。この旅で歩いたところは、十二月一日・三輪山の麓、穴師の里。二日・瓶原。三日・飛鳥の村。四日・神戸。五日・倉敷美術館。六日・神戸を散歩して帰京。こういう旅程ですが、とりわけ飛鳥の菖蒲池古墳とエル・グレコの絵(倉敷美術館)を見ることを主眼にしている。菖蒲池古墳は三年前に了兄と一緒に見物して、そのときはなんだか荒んだ古墳の印象を受けたけれども、これは古代人の死にたいする観念をひとつの形象として表している。

「古代の家屋をいかにも真似たやうな石棺様式、――それはそのなかに安置せらるべき死者が、死後もなほずつとそこで生前とほとんど同様の生活をいとむむものと考へた原始的な他界信仰のあらはれ、或ひはその信仰の継続」(『古墳』)である。人は死んでしばらくの間は山の奥などに生きているときと少しも変わらない姿で暮らしている、という挽歌が萬葉集にも見られる。大和の國の古墳にはそういう挽歌が具現されているような気持ちをして、自分は大和の國に切ないほど心を誘われている。こういうことを了兄に述べてから、エル・グレコの絵については、多恵子夫人宛のへはがき)のなかで、「けふ倉敷へいつてきた。静かな美術館でエル・グレコの『受

胎告知』の前でソファに三十分ほど腰かけて眺めてゐるうちにいい気持ちで居睡りしてしまつた。目がさめたら又自分がグレコの繪の前にゐるのでとてもうれしかつた。(十二月五日付)と書いている。

昭和十八年三月、今度は夫人同伴で、堀辰雄は五度目の大和旅行をする。「ずつとまへから馬酔木の花を見たいとおもつてゐた私は、今年こそとおもつて、こんどは妻を伴ひ、まだ雪のふりしきつてゐた木曾路を通つて、伊賀をへて、大和に出、ちやうどその花のさかりに往きあはせた。さうして浄瑠璃寺や室生寺をおとづれながら、そのゆく先き先きでその小さな白い花を見ることができた。うつすらと春の霜の下りてゐた室生寺の朝の印象も書いてみたかつたが、その低い門のかたはらに馬酔木の花のさいてゐた浄瑠璃寺のはうだけしか書けなかつた。」(『花あしび』後記)

この旅行によつて生まれたエッセイが、『辛夷の花』(昭和十八年「婦人公論」五月号)と『浄瑠璃寺の春』(昭和十八年「婦人公論」六月号)の二篇です。そこで先ず、『辛夷の花』についてですが、今回の奈良行きは木曾路をまわつて、木曾の宿屋での一泊も日程に入れていたので、汽車の窓から猛烈に雪の降っている木曾の谷々へたえず目をやっていた。木曾福島の宿に泊まつた翌朝も雪だった。まことにたよりない日ざしの具合だけれども、雪国の外に出たらひよつとして、うららかな春の空が待ちかまえているかもしれない。汽車がやがて木曾路の雪から別れてまもなく、天候は回復し、車内の乗客が、向こうの山に白い辛夷の花が見えた、と話し合ふ。「雪國の春にまつさきに咲くといふその辛夷の花」(『辛夷の花』)。これを

妻は車窓から眺めているが、夫は座席が反対側であるためについて見られなかつた。「自分と一しよになつて、そこいらの山の端にまつしろな花を簇がらせてゐる辛夷の木を二本見つけて、旅のあはれを味つてみたかつたの。」(『辛夷の花』)に、と夫婦旅の意外な無念さを滲ませた、抒情的なエッセイです。

奈良に到着してから、妻と私(堀辰雄)は浄瑠璃寺、阿弥陀堂、東大寺、三月堂、春日の森などを巡遊する。が、そのなかでも一番印象深かつたのは、浄瑠璃寺の門のかたわらに、咲き誇つてゐる一本の馬酔木である。『浄瑠璃寺の春』という題名はここからつけられたのですが、妻がその馬酔木の花を掌にのせて、仔細に見ているかたわらで、夫は左記の感想を述べる。

「どこか犯しがたい氣品がある、それでゐて、どうにでもしてそれを手折つて、ちよつと人に見せたいやうな、いちらしい風情をした花だ。云はば、この花のそんなところが、花といふものが今よりかずつと意味ぶかつた萬葉びとたちに、ただ綺麗なだけならもつと他にもあるのに、それらのどの花にも増して、いたく愛せられてゐたのだ。」(『浄瑠璃寺の春』)

大和に夫婦旅行をして古寺参拝をし、寺の馬酔木の花の美しさに見とれて、萬葉びとを回顧する。これはいかにも抒情的なエッセイであつて、当初の「大和路」の書名を、青磁社版で「花あしび」と改題した所以もここにあるのでないだろうか。

堀辰雄の最後(六度目)の大和への旅は、同年(昭和十八年)五月二十二日。このときの主たる目的は、京都在住のドイツ文学者で

ある大山定一、谷友幸、高安國世らに会って、甲鳥書林から出版する「リルケの手紙 全五巻」の翻訳の打合せをすることでした。そのため五月十五日から京都河峯旅館に宿をとって逗留しましたが、その最終日の五月二十二日付、堀多恵子宛に「へはがき」を書いて、「いま聖林寺に向ふ途中だ。こんどはバスがだめなら歩いてもいつて見ようとおもふ」と伝える。また、堀辰雄の回想記によると、「一番最後の旅は、去年（昭和十八年）の初夏、京都にしばらく往つてゐたとき、一日、櫻井の聖林寺をおとづれた旅である。この寺だけ見てゐなかつたのが、それまで心残りだったが、それで漸つと大和の古寺はおほかた見つゝしたことになるた。」（『花あしび』後記）

## 注

- (1) 本稿 1 ページ。  
 (2) 「堀辰雄全集 第八巻」一五四ページ。  
 (3) 「堀辰雄全集 第八巻」一一一三五ページ。  
 (4) 同右 三六〇四六ページ。  
 (5) 同右 五九〇六三ページ。  
 (6) 同右 六四〇六九ページ。  
 (7) 同右 七六〇八一ページ。  
 (8) 「堀辰雄全集 第九巻」九二ページ。  
 (9) 同右 同ページ。  
 (10) 「堀辰雄全集 第八巻」一五四ページ。  
 (11) 「堀辰雄全集 第九巻」一四三ページ。  
 (12) 同右 同ページ。

堀辰雄 管見 上野英雄

- (13) 同右 同ページ。  
 (14) 「堀辰雄全集 第八巻」一五四〇一五五ページ。  
 (15) 本稿 1 ページ。  
 (16) 「堀辰雄全集 第八巻」七七ページ。  
 (17) 同右 同ページ。ただし、( ) 内は筆者注。  
 (18) 本稿 1 ページ。  
 (19) 「堀辰雄全集 第九巻」二六九ページ。  
 (20) 同右 一七七ページ。  
 (21) 同右 一七九ページ。  
 (22) 同右 同ページ。  
 (23) 「堀辰雄全集 第八巻」三五ページ。  
 (24) 同右 一五五ページ。  
 (25) 同右 四〇〇四一ページ。  
 (26) 「堀辰雄全集 第九巻」一八三ページ。  
 (27) 「堀辰雄全集 第八巻」一五五ページ。  
 (28) 同右 六二ページ。  
 (29) 同右 同ページ。  
 (30) 同右 六五ページ。  
 (31) 「堀辰雄全集 第九巻」二一一ページ。  
 (32) 「堀辰雄全集 第八巻」一五五ページ。

### 信濃における晩年

堀辰雄の六回の大和旅行と古寺巡礼について、筆者は年代順にこれを考察しましたが、大和への思慕の根底には古代美への憧れだけでなく、ただぼんやりと目的なしに山路を歩きたいという気持ち

交錯していたようです。こういう二つの気持ちの交錯は信濃路巡りについても妥当します。信濃の山村の小さな石佛を中心にしたエッセイ『樹下』を、あえて作品集「花あしび」の巻頭に載せた所以でないでしょうか。

「その墓屋根の古い寺の、木ぶかい墓地へゆく小徑のかたはらに、一體の小さな苔蒸した石佛が、笹むらのなかに何かしをらしい姿で、ちらちらと木洩れ日に光つて見えてゐる。」(『樹下』)

それはいかにもお粗末な石佛で、顔も鼻のあたりが欠け、天衣も磨滅し、苔が半身を覆っている。右手を頬にあてて、頭を傾けている姿からして、思惟像といった感じの観音像である。私(堀辰雄)はその村(追分村)で夏を過ごしているうちに、その石佛のあたりを散歩するのが愉しみのひとつになった。そこにはときどき草花や線香の供えられていることもある。その寺の住職に聞いてみると、歯を病む子をつれてお年寄りがよく拌みに来るとのこと。あの石佛は何かの大きな(樺の木らしい)樹木の下にあった。それだから、木洩れ日が高いところから好い工合に石佛の上にちらちら落ちて、あんなに私を夢見心地にさせたのだ。私はふと樹下思惟といふ言葉を、その言葉のもつ云ひしれずなつかしい心像を、身にひしひしと感じた。(『樹下』)

そして何年ぶりかで、この頃またその村に住むことになった私は、「ときどきその石佛のあるあたりまで病後の身體をやつと運んでいっては、高原の初冬めいた日ざしを浴びながら、しばらくその前に眠んで、これらの旅の日の自分の姿などをそれからそれへと浮かべてはなつかしんでゐる。」(『花あしび』後記)

「大和路・信濃路」のなかで、「信濃路」に所属する作品として、この『樹下』のほかに、『斑雪』と『櫛の上にて』がある。そこで先ず『斑雪』(昭和十八年「婦人公論」四月号)についてですが、これは昭和十六年十二月末、僕(堀辰雄)がM君(森達郎)といっしょに信濃路を訪ね、その日(二十二日)はK君(葛巻義敏)夫妻の山小屋で四人で食事をし、翌二十三日にはM君と二人で野邊山ヶ原の斑雪のなかを歩いたときのことを綴ったエッセイです。

「けさほどから急に雪がふりだしてゐますの……」(『斑雪』)という手紙が萬里子さん(葛巻義敏夫人)からとどいたので、僕はM君を誘い、妻もつれて信濃路の雪を見に行こうとしたが、妻だけが悪くて二、三日あとから来る。ところが、K君の山小屋のある村に到着してみると、雪はもうほとんど消えて、林のなかに斑雪が残っているだけだった。このことを恐縮して、萬里さんはあんな手紙を書いて申し訳なかつた顔をする。僕とM君はどうせ明日、野邊山あたりに出かけるのだから、今夜は四人で食事をし、歓談すればいいのだということで、僕は「大和路の旅やエル・グレコの絵の印象などを話題にする。けれども、この夜、宿泊した軽井沢つるやから、多恵子夫人に宛てた絵はがき」には、「残念なことに雪はほんのすこししか無し。こんやかあすあたり雪ふらねば、何んの雪支度をしてくるに及ばざるべし。しかし冬木立のなから見える淺間山は雪に掩はれてゐて見事……あすは森君とどこか雪を求めてさすらふ積り」(十二月二十二日付)とある。

そして翌二十三日、僕とM君は小諸まで行き、そこから千曲川沿いに走るガソリン・カーに乗って、野邊山駅で下車する。この高原



の駅を出ると、そこはいちめんの泥濘だった。すぐ目の先に赤岳や横岳がけぎやかに見えているのに、この泥濘の道では野邊山が原をどう歩いたらいいのか。たまたま獵犬をつれた獵師が二人この駅でいっしょに降りたので、僕たちはこの獵師たちの後について歩く。だが、獵師たちは急に林のなかへ入ってしまったて、影も形も見えなくなる。僕たちの背後に来た郵便配達夫もすぐに通り過ぎてしまう。こんどは一匹の牝山羊をつれた若い女が現れたが、彼女は泥濘の道を平気でずんずん歩いて行き去る。僕たち二人は野邊山が原のなか、泥だらけの靴を重そうに運ぶしかなかった。そうこうするうちに、僕たちの歩いている道の両側が雑木林や畠に変わってくる。川を挟んだ小さな部落が見える。その部落の中ほどに古い木橋が一つ、「板橋」という部落名の目じるしのように懸かっている。そしてその橋の真上に、八ヶ岳が白じろと赫いて見える。

以上が『斑雪』の内容ですが、この翌日、小諸町蔦屋に宿泊した堀辰雄は、この旅の様子について、佐藤恒子宛のへがきで次のように報告する。

「また信濃の旅に出てゐます。きのふは野邊山ヶ原の斑雪のなかを歩いて板橋といふ部落まで行きました。それからはじめて小諸の古い町に一夜ですが寝ました。けふはこれから輕井澤にゆき、東京からくる多恵子たちと落ちあつてクリスマス(9)の眞似事をします。」  
(十二月二十四日付)

昭和十八年二月二日、別所温泉に一泊し、翌三日、堀辰雄は森達郎と二人で別所を立ち、上林温泉から雪橇に乗って志賀高原へ行く。

堀辰雄 管見 上野英雄

雪橇にはじめて乗って、雪山を登った印象について書いたエッセイが、『橇の上にて』(昭和十八年「婦人公論」七月号)です。

「僕は雪橇といふものをはじめて見た。——粗末な箱型をしたものに、幌とはほんの名ばかりの、繼ぎはぎだらけの鼠いろの布を被つただけのものである。馭者臺なんぞもない。それもそのはず、馭者は馬のさき立つて雪のなかを歩いてゆくのである。」<sup>(10)</sup>「橇の上にて」

幌のなかにはしかし、座布団、毛布、火鉢まで用意されて、その火鉢に足をのせて、その上から毛布をかけるようにいわれる。雪橇はごんごんと動き出した。幌の布の小さく綻んだところが、小さな窓の役目をはたす。そこに目を近づけると、雪に埋もれた茶店細かい雪がいちめん(11)にふりしきっている森や山が見える。急な坂道では馬が息をつくために休憩することもあり、反対側から別の雪橇が下りてくると、狭い道をゆずりあうのに苦労する。こうしてがたがたと揺られながら、いよいよ自分も久恋の雪の山に来ているという気分になる。自分の雪への思慕はいつ、どうして生じて来たのだろうか。

「突然、十年ほどまへ八つが嶽の麓にあるサナトリウムで生を養つてゐた自分のすがたが鮮かによみ返つてきた。冬になると、山麓のサナトリウムのあたりは毎日ただ生氣なく曇つてゐるだけなのに、山々はいつも雪雲で被はれてをり、そんな雲のないときには、それらの山々は見事なほど眞白なすがたをしてゐた。僕はそんな冬の日をどうしやうもなしに暮らしながら、ときどき雪の山のはうへ切ない目ざしを向けるやうになり出してゐた。そんな雪雲にすつか

り被はれてゐる山のものなかを、なにか悲壮な人間の内部でも見たいやうに、おそろおそろ見たがりながら。」（「櫛の上にて」）

三時間も雪櫛にゆられて、志賀高原ホテルに到着し、堀辰雄はさっそく多恵子夫人宛に左記の〈封書〉を書く。

「けさ別所を立つたときからふり出した雪がずっとやまずに上林温泉にきたときはもう随分積つてゐたが思ひきつて志賀高原行きを決心した。さうして雪のなかを三時間ばかり馬櫛にゆられて夕方著いた……こんどの雪景色はいつかお前に見せてやりたいものだ。」

（二月三日夜）

「婦人公論」に連載した『大和路・信濃路』をまとめて、『花あしび』という書名で青磁社から刊行したのが、昭和二十一年二月。そして同年三月、『雪の上の足跡』という対話体のエッセイを「新潮」三月号に発表し、これが堀辰雄の文学作品としては最後の原稿になる。

このエッセイには「高原の古驛における、二月の夕方の対話」という副題が付いている。そこで、「高原の古驛」とはこの駅か、という問題ですが、昔、武士に切り殺された宿場の遊女の墓に狐が夜ごとに訪れて、刀傷のような墓石の傷跡を舐めてやっていたという伝説が、この隣りの村にある。そして、その伝説のある「隣りの村」とは追分村ですから、「高原の古驛」は軽井沢駅と考えてよい。また、対話の「主」はもちろん堀辰雄ですが、相手の「学生」は雪の好きな学生で、チエホフ、トムスン、釋超空にも精通した文学青年ですから、さしずめ森達郎が考えられる。

雪原のなかには鳥獣の足跡が一めんについている。学生はその雪原のなかを歩きながら、こういう所を詠んだ立原道造の詩を思い出す。狐の足跡は一本の点線を残し、兎の足跡は一めんに入り乱れている、と主が教える。遊女の墓にまつわる狐の伝説も、この村ではなく、この隣りの村の古老から主が聞いた話だという。雪原の落日を眺めながら、学生に浮かび上った文学的感情。その一つは釋超空の「死者の書」を莊嚴にいろどった落日の美しさであり、もう一つは、フランシス・トムスンが「落日頌」のなかで歌った、あの野なかの十字架の上を血で染めたように赫やかせながら没して行く太陽の神々しさである。同じ落日を眺めた主は、「鷺の巢の楠の枯枝に日は入りぬ」という凡兆の句に心境を託する。主の最後の言葉は、「けふは、君のおかげで、枯木林のなかの落日の光景がうかぶ。雪の面には木々の影がいくすちとなく異様に長ながと横はつてゐる。それがこころもち紫がかつてゐる。どこかで頬白がかすかに啼きながら枝移りしてゐる。聞えるものはたつたそれだけ。（そのまま目をつぶる）」（『雪の上の足跡』）

前述のとおり、このエッセイが堀辰雄の文学作品の最後になりますので、これ以後の晩年の生活については、師友知人あての書簡、年譜、作家・評論家の回想記などを手掛かりにして付度して行かなければなりません。

そこで先ず、戦時下の疎開先についてですが、敗戦の前年（昭和十九年）の六月末、東京の杉並成宗から軽井沢一四二二に転居し、

七月十五日付、甲鳥書林の中市弘宛に左記の〈封書〉を書いてい  
 「小生先月末よりこちらに轉居して参りました。秋には追分のはう  
 に移り、そこで冬を越すつもりです……只今のやうな情勢では出版  
 のことなかなか御骨折だらうと御察いたしますが無力なる小生な  
 どには何んの御力添もできず甚だ遺憾です、まあ小生などは當分か  
 ういふ田舎で讀書生活を送つて來るべき日のために力を養つておく  
 ほかはありません……」<sup>(17)</sup>

そして同年九月には、その春に借りてあつた信濃追分の油屋の隣  
 りの家に再転居する。「輕井沢の山小屋は杉皮葺で寒さに堪えられな  
 いため」<sup>(18)</sup> だつたと言われる。当時の住宅難の様子について、油屋隣  
 の転居先から中里恒子宛のへはがき<sup>(19)</sup> では左記のやうに伝える。

「追分にも全然家はありません。雨の漏るやうな家まで人が棲ん  
 であるやうです。雪でもふるやうになつたらどうするのでせう。僕  
 は毎日ぼんやりと暮らしてゐます」<sup>(19)</sup> (十月十六日付)

また、同年十二月二十八日付、葛巻義敏宛の〈封書〉には、「今年  
 は燃料の不足で炬燵ひとつで我慢しなければならぬ……『大和路』  
 (青磁社から小さい本で出す)の校正、この次ぎの仕事(萬葉もど  
 きの小説)のことなどぼんやりと考へてゐる」<sup>(20)</sup> とある。

戦時下の時局柄だけでなく、この春の転居の準備中の咯血も祟つ  
 て、健康いよいよ優れず、金策にも窮して、甲鳥書林に原稿料の前  
 借りも依頼する(昭和二十年三月三日付)<sup>(21)</sup>。一方、多恵子夫人は畑仕  
 事に熱中し、馬鈴薯、甘薯、葱、豆類、南瓜、胡瓜、トマトなどが  
 毎日食べられる。野菜の花にも可憐なのがあつて、そんな花など眺  
 めるだけで、夫人の仕事の手伝いはできないけれど、自分のいまの

心境は、唐の詩人の「萬事傷心目前にあり 一身憔悴花に對して眠  
 る」<sup>(22)</sup> だということ、兼子らん子宛(同年八月十三日付)<sup>(22)</sup> と葛巻義  
 敏宛(同年八月二十七日付)<sup>(23)</sup> に書く。

堀辰雄自身の病状は小康を得た状態にあつたけれども、友人・知  
 人のなかには戦時中に急死者と病人が相次ぎ、とくに昭和十九年六  
 月二十七日、津村信夫が三十六歳の若さで急逝したときには、「津村  
 君の病気が難物であるのをお聞きしてつても 僕よりもさきに君  
 が亡くなられるとはゆめにも思つてゐませんでした」(昭和十九年  
 六月三十日付、津村秀夫宛)と驚異の心情を吐露する。これより先  
 の昭和十七年五月には、堀辰雄の少年時代から私淑していた萩原朔  
 太郎が死去し、「四季」九月号を「萩原朔太郎追悼号」として編集す  
 る。また、昭和二十年には折口信夫の養子、藤井春洋が硫黄島で戦  
 死したことを小谷恒から聞いて、「胸の痛いやうな氣がしました」<sup>(25)</sup>  
 (同年十月二十六日付)と折口信夫宛に書く。さらにまた、森達郎  
 が昭和十九年、結核で近江のサナトリウムに入り、昭和二十一年、  
 堀辰雄から、「君が大ぶ悪いやうなことを聞いたが、その後どうか」<sup>(26)</sup>  
 (十月一日付)と見舞状を受けたが、同年末、大阪の自宅で死去す  
 る。

昭和二十年八月十五日、戦争が終わると出版界にはわかに活氣づ  
 きますが、戦禍によつて焼失した原稿も少なくありません。折口信  
 夫の「古代感愛集」と堀辰雄の「大和路」の原稿が焼失したことを  
 惜しんで、同年十月二十六日付、堀辰雄が追分油屋隣の家から折口  
 信夫に宛てた〈封書〉から、焼失の事後処置についての部分だけ引

用すると、

『古代感愛集』の御上梓をながいことお待ちしてをりましたが御焼失の由残念でなりません 先生の御手づから製本なされた分を私にも御贈り下される由 本當にうれしくなりません 私の『大和路』も同様焼けましたがさいはひに紙型が残り これからも一度印刷するとか申して來ました<sup>(27)</sup>

当時、信州に疎開していた山室静が近辺の人たちを集めて、「高原」という季刊誌を発刊するので、堀辰雄にその顧問になつてもらいたい、という話を持ちかけられ、これに対して十二月七日付、山室静宛に、「顧問なんといふ四角ばつたものは止して、みんな一しよに同人としてやつて行きませう（これはせひさうして貰はなければ、僕はいやです）」と返信する。また、野村英夫が「四季」を復活させる話を持ちこんだのに対しては、「もう疲れた感じのする『四季』でなく新しい名前のもつて、やつていつて貰ひたい。」（十二月十七日付）と注文をつけ、「最近あやしげな本屋が簇出してゐるやうだから、よほど用心して話をすすめたまへ」（同右）と忠告する。

戦後の闇屋もどきの出版社の続出した時代でしたが、角川源義が新出版社をはじめるといふ話には、きわめて協力的な助言を惜しまず、ドイツ・フランスの文学から日本の文学にいたるまで、具体的にこういう詩人の翻訳や詩集を出版したらいい、と教示する（十一月二十一日付、角川源義宛〈封書〉）<sup>(28)</sup>

昭和二十一年（四十三歳）。前述のとおり、前年末、「四季」の復活に反対する意思を示した堀辰雄が、五月二十五日付、小山正孝宛

〈封書〉において、今度は「四季」再刊の決意を表明する。百八十八度転向した経緯について、その〈封書〉に聞いてみると、

「最初、僕は『四季』を前のままで再刊させるのは反対だった。いい人たちが次から次へと死んでいつて、『四季』がなんだか痩せ細つてゆくのが見てゐるに忍びなかつたのだ。このさい、一そもう、やめた方がと思つてゐた。——だが、戦後の文壇をみてゐると、こんどは『詩』の枯渴がひしひしと感ぜられてきた。これではいかん、いくら衰弱し切つてゐても、無理にでも引き立たせて、活を入れなければいけない、と考へ出してゐた。角川君とはじめて逢つて、『四季』の話が出たとき、急に再刊の決心をした。」<sup>(29)</sup>

そして自ら「四季」の編輯責任者として、創刊号の執筆は佐藤春夫、釋超空、室生犀星、三好達治、丸山薫、神保光太郎、中堪助に詩、神西清、呉茂一に散文を依頼し、それに堀辰雄のルルケの手紙の訳を掲載する。出版社は角川書店で、その角川書店が雑誌「四季」のほかに、「飛鳥新書」も刊行することになり、旧友で故人になつた立原道造の詩集から発刊することを、進言する。ところが、この夏頃から身体がひどく衰弱し、「四季」編輯の仕事ができなくなり、これをすつかり人に任せる。その憂慮すべき病状について、十月一日付、森達郎宛〈封書〉のなかで、次のように述べる。

「七月から鹽澤博士にときどき診て貰ひ先日はひさしぶりでレントゲンを撮つて貰つた 左半分は殆どやられてゐる上、右の上のはうにもすこし白いものがかかつてゐるので少々悲觀（しかし古い痕かも知れぬ由）まあ當分何も書かずに静養するつもり 君も早く元氣になつてくたまへ」<sup>(30)</sup>

この年はしかし、前述の『雪の上の足跡』を「新潮」三月号に発表し、また、『旗手クリストフ・リルケ抄』を「高原」第一輯（八月）に発表し、さらに、『堀辰雄小品集』繪はがき」を角川書店より刊行（七月）する。最後に挙げた「小品集」は、「私をはじめてものを書き出した頃の小品や翻譯から、ごく最近書いたものまで、雑然と集めた。そのおほくはその折々に雑誌などに書きちらしたまま、いまままで自分の本に入れるのをつい忘れてゐたり、又、改まつてそんな氣もちにならなかつたものばかりである。」（『堀辰雄小品集』繪はがき）あとがき）

昭和二十二年（四十四歳）。容態について、三月十二日付、神西清宛へ封書」によると、「寒いのでまだ寐たきりだが食事のときだけ床の上に起きられるやうになつた、その後胸の方は何事もないが三度ほどはげしい腹痛あり、病名不明だつたが、けふ鹽澤博士の診察にて脾臓が悪いとのこと（膽石のやうに石が出来てるのかも知れぬ由）で少々憂鬱だ、しかし大した事はないらしい。」

また、雑誌「四季」については、これをただちに廃刊にするのではなく、一時休刊という形にして、そのかわりに別の雑誌「飛鳥」を角川書店から出してはどうか、という提言を神西清宛に書く。「四季」のこといろいろ御面倒をおかけしてすまない。この頃すこし將來のことを考へてゐるが、もう僕にはからだか癒つても當分編輯などできさうもないしするから、五號位で休んで、『飛鳥』に出す手はないだらうか」（七月二十二日付）

この年のエッセイはただ一篇、『近況』を「四季」四号（四月）に

堀 辰雄 管見 上野英雄

発表する。これはいわば、「四季」二号の編集後記に相当するもので、「第二號の編輯を了へたのち、僕は病氣が悪くなり、仕事に堪へられなくなつたので、神西清君の好意に甘えて、當分代つてやつていただくことにする。」（『近況』）と記し、また、病床生活の近況については、「秋の半ばごろから、僕もやや小康を得てゐる。もうすこしちつと辛抱してゐたら、おひおひ快くなるだらうと思ふ。この頃、菊の花ばかりつづけて、さう三回ほど、人に貰つた。このへんの農家の籬などにむぎうさに咲いてゐる、黄いろい、こまかな花である。これが今年の最後の花だらう。それを枕もとに活けさせて、その下で、僕はなんだか一日中うつらうつらと睡つてゐることがおほい。」（同右）と書く。

昭和二十三年（四十五歳）。病状については、野村英夫宛の封書で、「を」とひ日塔君が訪ねてきた。そのとき君が大ぶ苦しきうな話だつたのでお案じしてゐる。僕の方も相變わらずの微熱と頻繁な喀血になやまされてゐる。どうにもしやうがないので、ただもうおとなしく寝てゐる。僕も頑張るから君も大いに頑張つてくれたまへ」（六月十二日付）。また、九月十七日付、中里恒子宛の（はがき）にも、「この頃また氣管支がせいぜい云ひ出して苦しい」とある。

文学上の仕事としては、「『古代感愛集』讀後」という折口信夫宛の手紙を「表現」九月号に発表しているが、これの内容については既述しました。

昭和二十四年（四十六歳）。神西清宛に、「この冬はまあ無事に過

ごせたししかしすつかり腰抜けになつてしまつた<sup>(42)</sup>（三月三十一日付）と一進一退の病勢を報告し、読書については外国文学が読めなくなつて、「ときどき寺田寅彦の隨筆集など手にして、あの中の映畫論など読み昔みたものを思ひ出してわづかに心を慰めてゐる。この頃は讀書もだんだん日本の古いそれも軽いものを讀むのがせいぜいで心細い<sup>(43)</sup>」（十月十五日付）。「文芸往来」一月号に『豆自伝』を発表する。これは略自伝の要約の要約で、わずかに一ページ未満のもの。最後の三行だけを引用すると、

「今私は信濃追分の假寓にゐる。この淺間の麓で、病を養ふやうになつてから、既に五年の歲月を過し、又凍雪の冬を迎へようとしてゐる。」（『豆自伝』）

昭和二十五年（四十七歳）。光文社から「菜穂子」刊行（五月）、新潮社から「堀辰雄選集」刊行（六月）、角川書店から「風立ちぬ」刊行（十月）。このほか、神西清との共訳による「ジイド全集」の印税も入り、家計が安定したので、自分たちの家を信濃追分に建てることに決め、その設計を考へる。

身体の方は相変わらず良くなつたり、悪くなつたりで、寝たり起きたりしていたが、脳貧血気味である。PASという結核治療の新薬をのむと急に熱が下がって、頭もすっきりするので助かる。十一月十九日付、神西清宛へはがき「口述」から、当時の病床生活について述べた部分を引用すると、

「僕の脳貧血的症状はまだすつかり消えない。原因がよくわからないので閉口してゐる。じつと寝てゐるので體が痛くてしやうがな

い。この頃は本も讀めないもので、先日求めた支那の花譜のやうなもの多恵子に名前を調べさせながら唯一の楽しみにして見てゐる。玫瑰花や斷腸花なんぞといふ花を始めて知つたりしてゐる。」<sup>(45)</sup>

昭和二十六年（四十八歳）。昔（昭和九年）、アンドレ・ジイドの『エル・ハチ』を翻訳し、これを建設社版「ジイド全集」第六巻に収録した因縁からか、この一月、新潮社版「ジイド全集月報VII」に「エル・ハチ」などを載せる。ただし、口述筆記である。それだけに理路整然とした文章で次のように述べる。

「ジイドがシヨパンにおいて愛したものは、やはりへもつとも純粹な音樂」と一ことで言へるだらう。ジイドがシヨパンについて語るとき、いつもポオドレエルの名が引き合ひに出される。シヨパンの音樂を考へるとき、ジイドはポオドレエルの詩を思はずにはゐられないのだ。兩者における完璧たらんとする願ひ、饒舌への嫌惡、さうして同じやうな不意打ち（surprise）の愛用、そのための極端な省略……」（『エル・ハチ』など）<sup>(46)</sup>

岸田国士、神西清、丸岡明らのお世話で『菜穂子』を映画化する話を持ち上がる。これに対する堀辰雄の態度は、「僕のはうはどうでもいい、どうせいまの日本映畫には何も期待できまいからね、しかしあの小説が果して映畫になるのだからかね、まあ松竹のはうに一切白紙で任せてもいいよ」<sup>(47)</sup>（三月十七日付、神西清宛）。七月に入つて、この話は本格化し、シナリオも第一稿ができて、新聞も大いに前宣伝をした。ところが、堀辰雄の亡くなる八日前、同氏を見舞つた佐々木基一が『菜穂子』はまだ映画になりませんね<sup>(48)</sup>と訊ねると、

あれはサギにあったのだと言う。「プロデューサーが金をもって逃げたんだそうだ」(「堀辰雄」)。

病状の方は相変わらず、頭部の向きを変へたりする拍子に、くらくらと目眩がする。ベニシリンを耳にたらしはといふので、やってみているが、一向によくならない。耳の故障だけでなく、痰にも苦しめられ、ストレプトマイシンを打ちつつける。そうすると大ぶ楽になる。

ところで、七月一日、新居が完成したので、ここに転居し、神西清(七月七日)、丸岡明(七月九日)、橋本福夫(七月十九日)に同様の文面の転居通知を差し出す。神西清宛の「へはがき」だけを引用してみると、「この一日に無事新居に引越した、これでどうにかこの夏は静かに過ごせさうだ、こんどの病室からの四圍の眺めはなかなか好きさう」(50)。この年の瀬にはさらに台所を建て増したり、井戸を掘らせたりしたことも、神西清に知らせる(十一月二十六日付)。

この年、愛読した本には、リルケの手紙、クロオデルの詩集、ブルースト、チボオデの「マラルメ」、デュ・ポスの「ノワイユ夫人」などがある。

昭和二十七年(四十九歳)。「週刊朝日」三月二十三日号の「妻を語る」と題するグラビアの欄に「わぎもこ」を書く。このなかで、妻(多恵子)の母方の祖父は土屋彦六といって明治のころ、静岡で牧師をしていた。その孫娘の妻は父の勤めの都合で香港や廣東で幼時をすごし、それから東京のミッシェンスクールを出て、私と結婚した。そして、「もう足かけ九年、こんな信州の山のなかにこもつて、

何ひとつ厭な顔をせず、寝たつきりの、めんどうな私のおつきあいをして貰っているのは、なんとしてもありがたいことだ」(『わぎもこ』)と言う。

病状について、神西清宛に書いた二通の「へはがき」によると、「一番閉口なのは目にフリクテンといふものが生じて鬱陶しく讀書が殆どできぬことだ、失明のおそれはないが處置なき由」(七月七日付)。もう一通の「へはがき」には、「僕はこのごろずつとヒトラジットを使用してゐるせいか気分はいいが、どうも血痰まがひのものが毎日出てゐて(醫者は薬のせいではないといつてゐるが)少々用心しいしい暮らしてゐる、折角訪ねてくれる客にもめつたに會はない」(八月十八日付)。

ところで、加藤道夫が前年の暮から油屋に滞在し、堀辰雄の小説『曠野』をラジオ・ドラマに仕組んでいる。そのため、この年は加藤道夫がもっとも頻繁に堀家を訪ね、病床の堀辰雄にも面談している。堀辰雄の病床生活の一端を加藤道夫の言葉に聞いてみる。

「病床の堀さんは僕の仕事をまるで自分のことのように心配して下さったり、僕の我儘なお願ひを快くきき入れて度々本を貸して下さったりした。貸して下さった本にはどれもこれも要所々々に傍線の引いてないものはなかつた。毎月とり寄せられる外国の新刊書や文学雑誌も枕許にうづ高く積まれてあつた。堀さんは寝ながら膨大な量の讀書をして居られたやうだつた。そして、断えず新しい小説のことを考へて居られたやうだつた」(「詩人の死」)。

昭和二十八年(五十歳)。昔(昭和九年)、『挿話』(56)という短編小説

を「文藝」に書いたことがある。今度、「新女苑」一月号に昔の作品から何かひとつの思い出を書くように依頼されて、「挿話」に就いて<sup>(57)</sup>というエッセイを発表する。関東大震災で母を失った「私」は父と二人でA川の上流の村で生活したことがある。それから数年後、自転車で再びその村を訪ね、「水邊悲歌」といった小説を書きたいと思う。その構想のなかの一挿話だけしか書けなかつたけれども、「私」は急に胸をしめつけられる思いで筆をおいた、という裏話です。

この年、浅間山麓に米軍演習地ができるという問題が起きていた。多恵子夫人はこの問題を夫の耳に入れないように気遣っていたが、四月十日、信越放送がそのことについての意見を聞きに来た。その放送記者に直接会ったりしてはいないけれども、演習地についての詳しい話を聞かされたことも、身体に障つたらしい。

「夫人ははじめ病人の耳に入らぬように、注意していたが、放送局の人が録音器をもって感想をききにきたため、堀さんにもとうとう分つてしまったと、その間のいきさつを話し、演習地になつたら、ここには寝ていられないわね。」と言つた。そうして、寝ている堀さんの方を向いて、へそなつたら、東京へ出て行くしかなないと云つてゐるんだわね。」と同意をもとめるように言つた。堀さんは返事のかわりに、軽く笑つた。<sup>(58)</sup>（最後の訪問）

これは堀辰雄の亡くなる八日前、五月二十日に同氏を見舞つた佐々木基一の言葉です。佐々木基一が堀家を訪ねたときはまた、屋敷の離れに書庫を建築している最中だった。

「堀さんの新しい家が建つてから、まだ一度もわたしは訪ねていなかった。庭の一角に亭のような一間が建ちかかつていて、大工が入つ

て、板を削っていた。書庫を建てているとのことだった。

堀さんは一ばん奥の四畳半の部屋に寝たきりである。北窓をあけると、寝たままで浅間を眺めることのできる場所を選んで建てたといわれるその部屋の、南に面した一間廊下の椅子にすわつて、わたしは主として夫人とお喋りした。夫人と話すのだが、自然に堀さんの興味をもちそうな話題を選んで話すことになる。<sup>(59)</sup>（同右）

新築中の書庫に書庫を設置して、諸種の本をどのように配列するか。堀辰雄が多恵子夫人に配列のしかたを指示したカードも保存されているけれども、生前には書庫の完成にいたらなかつた。また、堀辰雄の書いた最後のへはがき<sup>(60)</sup>は、四月二十九日付、三好達治宛とされている。これを引用すると、「……僕はあれからずつと一週間

おきぐらゐに『薔薇の花ほど』小さな喀血をつゞけてゐました。まだ用心中です。この二三日うちに急にコブシや梅が咲き出しました。しかしどうも春は苦手です。」

五月二十六日より容態逼迫し、二十八日午前一時四十分、信濃道分の自宅で死去する。

五月三十日、追分の自宅で仮葬を行い、軽井沢の火葬場で茶毘に付す。

「仮葬」と「茶毘」に直接立ち会つた門弟、加藤道夫の真に迫る追悼文を最後に引用して、筆者は拙稿を終える。先ず「仮葬」の模様については、

「三十人の村の人達の焼香でさ、やかな葬儀が終つたところだった。不器用な手つきで香をくべた老人達、待ちかねたやうに近寄つて我勝ちに掌を合せた農家の細君達、思はず声を上げて泣き濡れ



てゐた山の娘。……僕は眼頭が熱くなつた。詩人が此の山村の人達にこれほど慕はれてゐたと言ふことは知らなかつた。彼等には詩人の作品が理解出来ようとは思へない。唯、この自分達の生れた山の村をこれほど愛して呉れた詩人に対する素朴な感謝の涙なのであらう。

やがて、人々は詩人に最後の面会をする為に棺の周りに集つた。僕は、何かまだ信じられないものでもみるやうに、人々の背後から肩越しに詩人の死顔を見た。不凶垣間みたその顔は白臘のやうに美しく、安らかな死顔だつた。それで充分だつた。僕は、こみ上げる気持を逸らさうとして、眼を縁先から南軽井沢の山々に向けたが、此処では何を見ても詩人の死と言ふ觀念から逃れるすべはなかつた。……この自然。詩人が深く愛した山々は、変らず、其処にあつた。この山々と、自然と詩人の魂との間に人知れぬ深い交感が行はれて来た事実を、誰が否定することが出来よう？……詩人は或ひはこの自然にとりまかれた山村で死ぬことを望んでゐたのかも知れない。何故なら、この場所こそ詩人の「ボエジイ」の生れた場所だつたのだから。そして、この静かな自然にかこまれて詩人の本質的な営みがいとなまれたのだ。<sup>(6)</sup>（「詩人の死」）

次に「茶毘」に付するときの模様については、

「棺を閉める釘の音が僕を現実に戻した。……それから、人々は黙々と、三台の自動車に分乗して、詩人の遺骸を二里許り離れた山の中の小さな火葬場に運んで行つた。……五月とは言へ、まだ風が肌寒い夕方だつた。……詩人の遺骸は粗末な火葬場の竈の中に横たへられた。……遠くの林で郭公鳥が鳴いてゐた。……人々の最後の

焼香が終り、す、けた煉瓦造りの煙突から煙が立ち昇り始めた時、僕は今更のやうに鮮かに、詩人の生涯とその美しい作品達が脳裡に生き始めるのを覚えた。……時の浪に洗はれても恐らく消えることのない足跡を此の世に残して、詩人は去つた。……」<sup>(6)</sup>（同右）

## 注

- (1) 「堀辰雄全集 第八卷」八二ページ。  
 (2) 同右 八五ページ。  
 (3) 同右 一五六ページ。  
 (4) 同右 八二―八六ページ。  
 (5) 同右 四七―五八ページ。  
 (6) 同右 七〇―七五ページ。  
 (7) 同右 四七ページ。  
 (8) 「堀辰雄全集 第九卷」一八四ページ。  
 (9) 同右 同ページ。  
 (10) 「堀辰雄全集 第八卷」七〇ページ。  
 (11) 同右 七三―七四ページ。  
 (12) 「堀辰雄全集 第九卷」二〇七ページ。  
 (13) 「堀辰雄全集 第八卷」九二―九八ページ。  
 (14) 同右 九二ページ。  
 (15) 同右 九七ページ。  
 (16) 同右 九八ページ。  
 (17) 「堀辰雄全集 第九卷」二二六―二二七ページ。  
 (18) 「堀辰雄全集 第十卷」三六一ページ。  
 (19) 「堀辰雄全集 第九卷」二二二ページ。  
 (20) 同右 二二二―二三三ページ。  
 (21) 同右 二二七ページ。

- (22) 同右 二二八ページ。  
 (23) 同右 二二九ページ。  
 (24) 同右 二一六ページ。  
 (25) 同右 二三一ページ。  
 (26) 同右 二五六ページ。  
 (27) 同右 二三一ページ。  
 (28) 同右 二三四ページ。  
 (29) 同右 二三五ページ。  
 (30) 同右 同ページ。  
 (31) 同右 二二二―二三四ページ。  
 (32) 同右 二四九ページ。  
 (33) 同右 二五六ページ。  
 (34) 「堀辰雄全集 第八卷」一五七ページ。  
 (35) 「堀辰雄全集 第九卷」二五八ページ。  
 (36) 同右 二五九ページ。  
 (37) 「堀辰雄全集 第八卷」一三一―一三二ページ。  
 (38) 同右 一三一ページ。  
 (39) 「堀辰雄全集 第九卷」二六〇ページ。  
 (40) 同右 二六一ページ。  
 (41) 本稿 ページ参照。  
 (42) 「堀辰雄全集 第九卷」二六二ページ。  
 (43) 同右 二六三ページ。  
 (44) 同右 三四一ページ。  
 (45) 同右 二七二ページ。  
 (46) 「堀辰雄全集 第八卷」一三七ページ。  
 (47) 「堀辰雄全集 第九卷」二七六ページ。  
 (48) 佐々木基「現代作家論」(一九六六年) 未来社刊。一一六ページ。

- (49) 同右 同ページ。  
 (50) 「堀辰雄全集 第九卷」二八二ページ。  
 (51) 同右 二八五ページ。  
 (52) 「堀辰雄全集 第八卷」一三八ページ。  
 (53) 「堀辰雄全集 第九卷」二八八ページ。  
 (54) 同右 同ページ。  
 (55) 「堀辰雄全集 第十卷」二三〇ページ。  
 (56) 「堀辰雄全集 第四卷」二五―三三ページ。  
 (57) 「堀辰雄全集 第八卷」一三九ページ。  
 (58) 佐々木基「現代作家論」一一五ページ。  
 (59) 同右 一一四ページ。  
 (60) 「堀辰雄全集 第九卷」二九一ページ。  
 (61) 「堀辰雄全集 第十卷」二二九―三三〇ページ。  
 (62) 同右 二三一―二三二ページ。